

自享保十一年
至同十六年

毛利十一代史

第二十三册

泰桓公記

毛利十一代史卷之五十五

大田報助編

泰桓公記 十五

明治
43.10.26
寄贈

享保十一年丙午正月朔日公萩城ニアリ

十二日村上權右衛門高祖父宇賀島百年忌ニ付米三俵下付

宇賀島ハ元就公妹八幡上備後國八幡城ノ孫ニテ子分トナセシヲ宗瑞公養育アリ

權右衛門高祖父田中德庵妻トセラレ是時田中ヲ知行貳百石附與德庵以來奉仕セ

シニ權右衛門父彌右衛門故アリ家名斷絶セラレタルモ宇賀島ニ對シ權右衛門新

規ニ採用アリタル由緒陳情ニ依テ也

十四日毛利但馬守廣豐德山ヨリ出萩十五日城中ニ於テ料理ヲ差ム十六日能舞ヲ觀

セシム二十二日萩ヲ發シ德山ニ歸ル

二十七日諸臣扶持方成出願之輩へ訓令左ノ如シ

覺

一御家頼中勝手逼迫之面々爲御救先年々御扶持方之仕法有之借銀返濟仕來候去々年御馳走來被返下借銀調方之儀をも段々被仰付候へ共年來の因窮至極の衆一先爲御救愈以御扶持方の仕法被立置猶又御なやみの借銀の員數をも過分に被相増内借迄も餘分相加り願次第追々被仰付儀候然共逼迫は御家頼中大概一等の儀に候へは御馳走米等被返下重疊御恵み之上は取續相成苦敷衆も随分遂吟味内證は御扶持方同前の心得にて如何體の仕組被仕候而も取續被遂御奉公候心得可爲勿論候猶其上にても抽候逼迫表立申立之品も有之取續之絶方便候衆は御扶持方之願被仕如願被仰付候上は諸事の心得も其相應に可有之儀候處御扶持方の内間々不相應の儀も有之様に相聞候御扶持方の儀逼迫及至極誠に不得已儀とは乍申御奉公相止知行御預りの願申上一旦家を潰し候體に罷成候段大切の儀輕々敷可被存儀にて無之候處自然は付出借銀の内内借等には様子も有之様に相聞候御家人として全有之間敷事候得共憚候體も無之中帯にて世

上徘徊仕衆も有之段御奉公得不仕様に罷成候を苦身にも不存外聞をも不願體に付而不宜聞えも有之事候萬一御恵に募勝手を本として逼迫不及至極衆も御扶持方相願殊不相應の儀共有之候而は御奉公之失本意風俗を亂す甚甚不心得之儀尤道理至極を以實に及困窮御扶持方被相願候衆も共に御不審を蒙候様に有之段他の妨をも仕旁以不謂儀候間急度御咎被成候と可有之候條只今迄御扶持方に相成居候衆も亦此後申立之品を以被相願候衆も右之趣能々被相心得内外諸事御扶持方相應に被仕尤自今被相願候衆は愈以取續之盡方便至極の上可被申出候事

附再往御扶持方成之儀一代之内は不及申縦代替候とも年數間無之候は、自今被仰付間敷候雖然至極の斷於有之は依其品僉議の上被仰付儀も可有之候事

一御扶持方之仕法被仰付候儀は道理至極を以及困窮御家人難相續衆爲御救被仰付置儀候處還て御扶持方を目當に仕兼而取續の覺悟緩せに被仕様に相成候而

は上之御惠之筋と甚違却の儀候間以來共に御扶持方の儀至極大切に被相心得
常々の覺悟愈以緩せ有間敷候事

一御扶持方の内は御奉公不仕身分に付 御目見をも不被仰付其故袴着用をも被
差留儉約一廉の儀に候へは大概門外不出の心得にて無據用事の外は親族朋友
の交をも不仕引籠罷居可被申段御扶持方可爲相應候縱無據用事有之被罷出候
共夕方夜分の間たるへく候事

附夕方夜分たりとも上下著用の一座え被罷出候儀縱親子兄弟間たりとも全
可爲無用候尤無據間柄法事焼香等の節は被申出次第可被差免候事

附堀内被罷出候儀は夕方をも被致用捨無據儀有之節は夜分たるへき事

一御扶持方の内は養子縁職等の御断先可有延引候雖然無據延引難成譯於有之は
被申出次第僉議の上被差免儀も可有之候尤嫁娶の儀造作入の事候間如何程輕
く被仕候とも取遣とも一切可爲無用候事

附御扶持方の内死去候衆跡職の儀は御目見をも不仕身柄候間自今は借銀返

濟知行被返下候節被仰出にて可有之候事

右御扶持方の面々自今共此旨能々可被相心得候右之趣は御目付衆えも被仰付外
向の儀は不逮申内證向の儀迄も諸事見聞被仰付此已後若不相應の儀於有之は急
度可及御沙汰候尤此已後御扶持方の願申出候衆有之節は於支配所勝手向の儀申
立の品得と遂吟味取次可被仕候此段支配中えも可被申聞候已上

享保十一年正月二十七日

右御書付御扶持方成衆えは遠近支配所え壹通御一門老中月番益田越中殿へ物
頭組へ八組月番福原貞右衛門殿へ御手廻組へ寄組月番熊谷帶刀殿へ國司隼人
殿完戸宮内殿へ寺社組へ御船手組へ御目付所へ何れも壹通宛御渡させ被成候
事以上拾壹通

覺

一御扶持方の内嫁娶取遣の儀向後被差留候然共何そ至極無據譯有之候は、各迄
内々に而被申聞候様に内意の事

一御扶持方成衆家頼の儀供若黨は不及申惣て袴着用不仕様に縦於于時主人袴着用被差免候節と候而も家頼は袴無用の段内意の事

午正月二十七日

右之趣完戸宮内殿御扶持方中え内意の御沙汰相成候事

御目付衆え被仰渡候書付

御家頼中至極逼迫の面々爲御救御扶持方の仕法被立置願次第逐々被仰付儀候處御扶持方の内不心得の儀も有之様に相聞候付此度被仰出候趣書付を以申渡候間各右之通被相心得見分聞合をも被仕此已後内外身持行跡不宜御扶持方不相應の儀も候は、可被申出候尤内外諸事御扶持方相應に心得宜衆有之候は、是又見聞の趣可被申出候事

二月五日ヨリ七日ニ至ル壽徳公三十三回忌東光寺ニ於テ法會修セラレ

九日新山十郎左衛門數十年自他國勤續七十歳ニ達シ隠居願許可ニ由リ時服下付

同日桂勘右衛門元堅病死ス生存中出願嫡子平五郎急症ニテ死去ニヨリ勘右衛門弟

尾越藤藏ヲ養家ヨリ復歸家續セシメント請願セリ末期ノ法ヲ以テ知行高千七百三十石五斗五升ノ内五百三十石四斗五升減少殘高千二百ヲ藤藏ニ相續セシム
十一日毛利但馬守徳山ヲ發シ三月七日著府
十四日扶持方成ノ輩ニ關シ遠近方伺定左ノ如シ

覺

一御扶持方に而罷居候衆中の親子兄弟祖父祖母孫伯父伯母甥姪舅しうとめ聲嫁他家に罷居難儀に相煩候節見廻之儀者晝の内に而も御差免可被成候哉

一御扶持方に而罷居候衆の子共衆學文武藝等稽古仕候衆は銘々稽古場申出被仰付御開扉の上晝の内被參候儀可被差免候哉

右之通各より相伺候處可被差免との御事候已上

午二月十四日

齋藤伊右衛門

山縣市右衛門

右伺書午二月十四日達 御聞候事

但右書付完戸宮内殿え壹通御扶持方衆之儀は遠近支配所へ壹通同日に相渡候事

十五日公儀山へ入湯二十八日歸城

十六日幕府奴僕口入業ヲ禁ス備川實紀

廿一日遠近方告示左ノ如シ

萬治三年九月御書付

一玄關腰掛におひて小歌高聲又は玄關腰かけ塀長屋の腰板等に樂書をし彫目を付候事甚狼藉之至なり面々下々え此段手堅被仰付候上は自然相背もの於有之は過料依品可有其沙汰事

右之通被仰出候處に於于今は狼に相成候様相聞候間自今下々え手堅被申付候様にとの御事に候已上

午二月廿一日

遠近方

廿二日領國內人口調査ニツキ大目付回狀左ノ如シ

覺

一去る丑年被差出候通諸國領地の百姓町人社人男女僧尼等其外のもの共迄不殘今年相改惣人數郡切書記領分限に可被差出候此度は田畑町歩の書出に不及人數計書付當四月より霜月迄の内勝手次第可被差出候尤何月改何歳以上認候と申譯書加可被申候且又武家方の奉公人并又ものは被書出に不及候事
一向後は相觸候に不及子年と午年に今年の通可被心得候事
右之趣萬石以上并老中若年寄中支配え可被相觸候若難心得儀も候は猶又御勘定所へ可承合候自今至其年候は右之通書出候様に可被相違候勿論子年午年と有之は今年と七年目との事に候御料の分は御代官より御勘定所え私領の分は頭支配え書付出候様に可被達候已上

午二月

前令ニ因リ十月防長兩國人數帳勘定所へ提出セララル
人員合計四拾六萬千四拾人

内貳拾萬八千七百四拾七人 女

三月朔日吉宗將軍吹上ニ於テ參府蘭人ノ乘馬ヲ觀ル德川十五代史

六日毛利但馬守廣豐女吉子德山ニ生ル母 女房重子

十日 御扶持方衆 隱居

拾歳以下之 子供 女中

右之通查之内歩行勝手次第被差免候事

右之趣享保十一年三月十日林彦右衛門え口上にて申達候事

十八日大頭役益田越中辭職ヲ許シ福原豊後ニ後任ヲ命ス旗奉行祖式又右衛門辭職ヲ許シ召下羽織下付

廿四日小金原狩場ノ條令ヲ頒ツ德川十五代史

廿五日杉山權右衛門嫡子貞右衛門妻及下女着用ノ衣類違法ニツキ貞右衛門ニ逼塞ヲ命ス

廿七日林三右衛門用所役ヲ免シ作事方ヲ命ス長井二郎右衛門ニ用所役ヲ命ス玉木

太郎左衛門ニ平川長左衛門代吉田代官ヲ命ス平川長左衛門ニ京都留守居ヲ命シ雜賀十右衛門ト交代セシム

廿八日平川半左衛門小性役ヲ免シ手回組ニ加フ多年勤勞ニヨリ銀貳拾枚下付

四月二日警火之制訓示左ノ如シ

覺

火用心の儀常々被入御念儀候得共就中南風東風之節 御城え風並惡敷所に火用心別而肝要の事候面々も兼而其心得可有之儀候得共彌以南東の風吹立候時分は主人々々火の本に氣を付下々えも急度被申付屋敷内外打廻り等被申付候儀緩せ有間敷候尤 公儀も南東風の時分は片河吳服町平安古河添邊え格別火之廻り被仰付儀候條被得其意晝夜共火用心念を入可被申付候事

享保十一年四月二日

九日本多兵庫吉元日光奉行奉命ニツキ請求アリ銀貳百枚進セラル

十九日諸奉公人ノ下請ニ關シ大目付回狀左ノ如シ

武士方々家來諸奉公人主人下請に立候者有之候は、奉公人出入之節奉行所へ呼出候上請人同前に出入金可申付候間主人え斷有之次第右家來奉行所え無滞可被差出候以上

右之趣向々え可被相達候以上

午四月

廿五日毛利但馬守廣豊松平遠江守忠喬女へ納采

五月十一日扶持方成中養子縁職ニ關シ内訓左ノ如シ

覺

御扶持方に而被罷居候衆養子縁職等之御斷無據儀の外は被致延引嫁娶の儀は造佐入の事候間取遣とも一切可爲無用の由寂前御書付を以被仰出候然處に再婚の儀諸道具等用意可有之儀に候へは規式をは御扶持方相應に被相調各別造佐入於有之は取遣ともに御了簡を以可被差免候間此段内意申達候様との御事

享保十一年五月十一日

右宍戸宮内殿林彦右衛門え内意申達候事

十二日根來主馬大組頭ヲ免シ召下羽織下付佐世大學ニ大組頭ヲ命ス

廿日物頭赤木藤右衛門ニ山田宇兵衛代赤間關在番ヲ命ス

廿三日西九分限帳編成ニツキ氏生國明細書兩九へ兩通提出セラレ

本國安藝 養父大膳大夫吉廣 實父毛利甲斐守綱元

高三拾六萬九千四百拾壹石長門兩國一圓 從四位下侍從松平長門守

生國武藏 居城長門萩

午ニ五十歳

内證分

高四萬七千三百四拾九石八斗四升五合

長門國之内

毛利甲斐守

高三萬石

周防國之内

毛利但馬守

享保十一丙午年五月廿三日

廿四日中村孫右衛門藏元役ヲ免シ生田伊右衛門ニ後任ヲ命ス

廿八日公大納言家重袖留ヲ祝シ萩ヨリ飛札ヲ呈セラレ

六月朔日浦圖書免職後初テ登城料理ヲ賜ヒ刀一腰末包永代拾枚 下付

七日幸橋夫人裏老姥川權左衛門病死ニツキ三隅勘右衛門ニ後任ヲ命ス

九日淨圓院卒去將軍ノ生母ナリ公弔書ヲ呈セラレ

十日贈博禁止ニ關シ訓示遠近方告示左ノ如シ

覺

頃日端々博奕打候所有之由相聞候定而市中其外に而も末々の從者共之遊事より起り候而之儀に可有之候此儀にかゝり候ものは渡世の經營をも忘れ長し候へは盗人火付等の惡調儀の元とも相成 天上一統堅御制禁の事候處甚不謂儀に候依之御目付中并所々被差出置候役人中えも改而被仰渡穿鑿被仰付儀候間相しれ候上は急度御仕置に可被仰付候就中頭取の者并宿仕候ものは別而其料重かるへく候且又五人組は不及申隣家うら向ひの者其所の手寄役人等迄曲事に可被仰付候條其趣能々相心得其已後不審の儀有之候は、密に可申出候尤過去候舊惡の儀は申出に不及候右之廉々市中其外支配之者共え手堅可被申付候以上

享保十一年六月十日

頃日端々に而博奕打候所有之由相聞候付而其穿鑿被仰付別紙之通粟屋半左衛門河野茂兵衛え被仰渡候諸士中家來之儀も小者中間等には不心得之者も可有之候條常々主人、氣を付入念可被申付候若不心得之儀有之候は、依品主人の越度にも可相成候間此段内意申達候様にとの御事

午六月十日

山縣市左衛門

齋藤伊右衛門

粟屋半左衛門町奉行河野茂兵衛當島代官也

日不詳足輕以下無紋黒羽織禁止訓示左ノ如シ

頃日下横目に紛候羽織著用仕候もの有之不心得の儀に候向後は足輕御中間以下惣而右類の者無紋の羽織著用仕下横目紛候儀仕間敷候若相背候もの有之候は、きつと可被及御沙汰との御事

享保十一年六月

七月二日公子姫君歩行ノトキ庖瘡人ニ關シ遠近方告示左ノ如シ

覺

御子様方御歩行の節庖瘡人有之所の道筋御除被成候付而萩内諸士中寺社家其以下并濱崎町近廻の百姓屋共に庖瘡人有之節申出の儀最前委細各々相達候然濱崎當島兩宰判内諸士中寺社家諸細工人足輕已下に至迄居宅借宅下屋鋪にても庖瘡人有之節は前方御沙汰の趣を以河野茂兵衛方え被相届候様にとの御事

享保十一年七月二日

山縣市左衛門

齋藤伊右衛門

五日幕府向用務依頼之日付三宅大學轉任ニツキ長谷川與左衛門ハ依頼ニヨリ廣折三十束申海鼠一箱贈ラ

六日町並住居來細工人ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

町人細工人え諸士中ハ扶持遣置被申候もの、儀萬治御制法之趣有之儀候處於于

に今は令混雜諸細工人町並に罷居脇細工仕町細工人の帳面に載り 公儀水役相勤候者の内諸士中の家頼分にて宗門判形等相整身柄町並の支配をはつれ候もの有之由候然時は一人の支配兩方えかゝり諸沙汰差つかへ申儀に付右之通の町細工人の儀は諸士中ハ内證にて扶持遣置被申候ものにて此已後は宗門究を初町細工人一篇の沙汰被仰付候勿論一切脇細工不被申付町細工人の帳面をはつし全家頼細工人に相極候者の儀は格別の事

右之趣を以可有沙汰候以上

享保十一年七月六日

右之通粟屋半左衛門河野茂兵衛方え被仰付候條可被得其意候已上

同日

十二日八幡上備後御調郡八幡村八幡城主遊百五十回忌秀岳院ニ於テ法會修セラレ
十五日五萬石以上ノ大名ニ是迄馬ヲ献スルニ必馬預リ諏訪部文右衛門カ檢定ヲ經
タリシカ今後ハ其事ニ及ハスト令ス徳川十五代史

廿二日稻葉玄蕃頭夫人守毛利但馬守姉喜久死去萩地八月九日ヨリ十一日ニ至ル鳴物停止

同日堀内追回シノ馬場修理竣成ニツキ向後是馬場ニ於テ乘馬スヘント内訓アリ

廿七日代役之輩本役讓與以後謁見ハ勿論御禮代等提出ニ及ハストナリ

日不詳平安湖滿行寺蓮池ニ雙頭蓮生ス

八月五日毛利讃岐守匡廣長府乗船

七日唐船一隻阿武郡須佐浦ニ到ル九日ヨリ伐攘ヲ始メ十一日之ヲ砲撃沉溺セシム

舊記所載八月七日申刻奥阿武郡須佐浦の沖子の方え當唐船一艘漂流同八日晚唐

船右の浦より一里程沖漂來の折節船中より水を汲に一兩人揚陸仕候を幸と人質

に取置珍味を以斃置船中えは此方々丁寧に令仕入落着せ候て御所務代栗屋八右

衛門方々萩え注進仕候風波強即刻打拂不相成候尤兼而打拂役御手當の物頭井上

源三郎小笠原仁左衛門早速彼地被差出御目付兼重五郎兵衛大筒役四人須佐浦被

差出九日酉の刻風波靜に相成候付打拂仕候處出帆不仕候付十日の晝猶又稠敷打

拂候得共唐船も鐵砲杯打懸手向仕候付十日夜中増人數として兼て肥中御手當

の物頭井上清右衛門熊野五郎兵衛兩人須佐浦被差出至十一日増人數一同に打續

候覺悟にて打掛候處晝時分唐船も難遁候哉唐船え唐人より火を掛及燒亡候唐人

共二三人鐵砲にて打殺候付追々死骸長崎え被差送候右之趣爲御注進村上又右衛

門兼重五郎兵衛兩度に江戸被差登候伊藤喜右衛門井上源三郎兩度に長崎被差越

候村上伊藤休息の内御人差にて兩方共御首尾好相濟候將又唐船燒殘の船具作廻

の儀長崎御窺被成候處不殘燒捨候様との儀に付其通に被仰付候且又打拂爲後詰

十一日の夜御鐵砲頭檜崎與兵衛刺賀佐左衛門熊谷七兵衛三井九郎左衛門須佐迄

被差出候得共燒亡に付此四人は十一日の晚歸萩被仰付候肥中えは市川三右衛門

三戸勝左衛門被差出候得共是又右之趣に付早速引取申候且又須佐浦唐船燒亡已

後唐人死骸船具旁若浮上り候節作廻其外諸事ベリとして御目付兒玉市之助物頭

刺賀佐左衛門熊谷七郎兵衛十日被差出置候打拂の面々え天下々拜領物江戸於御

城御老中水野和泉守殿被仰渡候

十一日長門國豐浦郡毛利讃岐守領地七月五日ヨリ六日ニ至ル大東風高潮ニテ田畑

其他被害之景况幕府へ報告左ノ如シ

一田畑高四千九十石餘

但潮入皆損

一土手崩千七百九十二間

但石垣共

一土手石垣二百九十二間餘

一波除石垣五十七間

一倒家二百一十軒

但民家漁人家共

一倒木六百本餘

一道筋崩十六町餘

一破損船大小二十二艘

一旅船破損九艘

一怪我人無御座候

一牛馬怪我無御座候

右之通御座候以上

八月

毛利讚岐守

十一日ヨリ十二日ニ至ル廣國夫人秀就公女松平五十回忌大寧寺ニ於テ法會修セラ

ル福原豊後ヲ代拜セシム

廿五日毛利但馬守廣豊松平遠江守女ト結婚ニツキ使者ヲ出府セシメ毛毘廿枚鹽鶴

一隻遣ラル

廿六日弘正左衛門素行修ラス母子へ不仁ノ舉動アリ因テ家人ヲ放テ國中出入ヲ禁

ス老母及幼穉兒女へ捨扶持米六石下付

廿八日有地又右衛門ニ麻布邸在勤ヲ命ス

晦日唐船伐攘ニ因リ村上又右衛門ヲ出府セシメ報告畢テ閣老松平左近將監奉書ヲ

授ク

九月二日邸地讓與ニ關シ閣老交付書付左ノ如シ

覺

一總て百姓地抱屋敷并町並屋敷町屋敷所持の面々讓渡の儀百姓地は百姓え町屋敷は町人え讓渡候儀にて筋違候者え讓渡の儀は不成事に候讓渡候節誰方え遣候段屋敷改え途相談屋敷改差圖次第遣候様に可致候

一武士より武士え遣候儀又は百姓地を町人え町屋敷を百姓へ遣候儀不成事に候乍去各別の由緒も有之候は、屋敷改え相届差圖次第に可致候

右之趣近年猥成様に相聞候向後相違無之様可相心得旨向々え可被達候

午八月

八日諸寺院本末矛盾ニ關シ訓令左ノ如シ

覺

萩在々共に諸寺院本末の出入其外申結有之節且家并俗縁知音の百姓町人等引掛け相談人數に相成強て理非の差別をも不辨取持心遣仕候者間々有之に付爲差様

子無之儀をも申募不得止事様相成候儀毎々有之由相聞甚不謂儀に候寺家の儀は法中の沙汰筋有之事候間此已後寺家の申結俗人取持心遣仕候段於露聞は曲事に可被仰付候事

但社家も同前之事

右之趣手堅可被申渡候以上

享保十一年九月八日

右之通町奉行御代官中え彼仰渡候

御家來中之儀は貞享五年御書付之旨も有之儀に候得共猶又右之趣被相心得候様に各々内意申達候様にとの御事

享保十一年九月八日

山縣市左衛門

齋藤伊右衛門

貞享五年御書付之寫

一寺社家々公儀え之御斷其外公事有之時俗縁の者取持候儀一切可爲停止若相

背もの於有之は可被及御沙汰事

十一日唐船伐攘ニ關シ閣老交付左ノ如シ

一 近年唐船漂流之沙汰無之候得は打拂の儀彌以前に申達候通別而無油斷可被相心得候

一 唐船漂流之刻扱買筋の船に相見え申候は、打拂の儀兼而申達候通可被心得候併打拂候而も出帆不仕候は、船具等にて打損し出帆難成儀も難計候間左様の節は二三日も様子見合舟をよせ彌舟具等を損し出帆難成趣に候は、長崎へ送り候様に可被仕候

一 打拂之刻出帆仕候は、先達申達候通打拂の儀見合尤少々は追懸長く追懸け申儀は無用に可被致候以上

九月

十三日唐船伐攘ノトキ目付役一人兼重兵衛物頭人井上源三郎小笠原仁左衛門へ白銀二十枚時服二宛下賜別ノ物頭兩人へ時服二宛下賜ノ旨閣老水野和泉守命ヲ傳フ須佐油ニ於テ賞美也

十五日浦圖書當職在勤中會計一紙正徳二年八月二日ヨリ公開ニ達ス圖書へ料理ヲ賜

ヒ脇差友次代金五兩一腰下付上勘頭取羽立彌三右衛門張半右衛門銀壹枚下付

十六日疵金輕目金通用ニ關シ閣老交付書付左ノ如シ

疵金輕目金通用之儀去る丑年卯年兩度相觸候處に今以通用相滯候由相聞え候自今彌無滯可致取引替諸國兩替屋共えも此旨支配々々より急度申渡若又武家方并町方百姓等不請取者も有之者兩替屋方より其支配へえ被申出候筈に申付候間武家方町方百姓末々迄無滯可致通用候若此已後彼是申致難澁歩銀等取候兩替屋有之は其所の支配え早速可訴出候吟味の上急度可申付候

右之趣江戸京大坂は勿論其外御料は御代官私領は領主地領より急度可被申付候以上

九月

十八日毛利讃岐守神田橋門番命令アリ

十九日營作竣成月數期限申告ニ關シ訓示左ノ如シ

作事相調候月數物切の儀最前被仰出候然處當月物切の分も有之候所に頃日迄成就の段御目付所え届無之衆あまた有之由に候定而當月中いつれも成就仕候て可有之候得共自然間違有之候てはいか、敷事候間内意被仰聞尤此已後の儀はいつれよりも物音有之間敷候條間違無之様に被入御念御沙汰可然存候事

享保十一年九月十九日

廿一日公湯治ノ爲メ俵山ニ赴キ十月十二日歸城

廿六日毛利但馬守江戸發十月廿日歸邑

同日防長内七月五日六日大風洪水ノ爲メ被害景況幕府報告左ノ如シ

一高貳萬八千石餘

一土手石垣井手川除等壹萬五千間餘

一道路貳千貳百間餘

一落橋三十ヶ所

一倒家八百十五軒

一倒木七百五拾本餘

一破損船大少貳拾五艘

内二十三艘艘破損船

一溺死八人男

但破損船の船頭舸子に而御座候

一牛馬怪我無之候

以上

右之通御座候依之申上候以上

九月廿六日

松平長門守

廿一日長崎役松浦喜左衛門ニ井上七右衛門代山代代官ヲ草刈六左衛門ニ長崎役ヲ命ス

廿五日内藤紀伊守信輝死去公從弟ノ續ニツキ三日ノ忌受ラル萩山口三田尻鳴物三日間停止

廿八日尾寺長左衛門ニ右筆副役ヲ命ス

同日萩城ニ於テ須佐浦唐船伐攘ノ勞ニ因リ兼重五郎兵衛井上源三郎小笠原仁左衛門井上清右衛門熊野五郎兵衛へ召下羽織壹宛銀拾枚宛代官粟屋八左衛門時服壹銀拾枚物頭兒玉市之介熊谷七郎兵衛刺賀佐左衛門へ小袖壹宛其他總役員益田越中家老總打方中へ下付品差アリ

十一月朔日八組頭へ組中家計ニ關シ内諭左ノ如シ

八組頭え御抄挨之趣

八組中當暮之作廻別而不勝手の趣に付度々被申聞候通令承知候一兩年就中米下直に相成貸銀も彌不如意之由に候へは旁不勝手の段左様も可有之候得共公儀御所帶の儀も切詰候御積りに而御餘計無之段は去々年御仕組被仰付候節各えも御聞せ存知之通に候其後も不意の御臨時并御米紙下直に付和市違旁々にて莫大の御不足有之儀に候へは御家頼中勝手差詰其段如何程御苦勞に被思召候ても此上格別可被仰付様無之段は勘辨も可有之儀尤去々年御馳走米被返下候節此已後

之儀一分ノ覺悟を以取續候様にとの儀被仰渡通候然共各被申聞候趣に付若々吟味の筋も可有之哉と役人中僉議をも申付候得共別段の儀無之候米穀下直に相成候へは夫に准し萬物も次第に下直可相成事候間面々儉約の上にも猶々吟味を盡し一分ノ覺悟を極何分取續被仕の外無之候近年の通添狀借銀先等の儀可相成程は役人中心遣申付に而可有之候條右之趣得と勘辨被仕組支配中えも兼而内意可被相達置候事

四日島田孫助古萩屋敷ニ於テ死去海潮寺ニ葬ル四日ヨリ三日間萩諸臣鳴物停止

此時島田孫助遺言アリ家臣井上貞右衛門大組ニ加へ十二人扶持給與平岡與右衛門西村仁右衛門九人扶持給與遠近付ニ加フ孫助へ給與三十人扶持如上三人へ配與セラル

五日周防徳山中間町出火本軒百拾八戸裏家十七戸竈數百六十九土藏壹奉公人家六戸焼亡セリ之ヲ幕府ニ報ス

六日吾藩大阪抱石三十本割石シテ幕府へ公收セラル、ニ由リ破損奉行へ交付ス

九日供從ノ中間以下損傷ノ笠合羽著用禁止訓示左ノ如シ

御供之節御中間以下之者笠合羽等見苦様候を持參著用不仕候様御供に出候ものともへ支配ノより兼々手堅申付候様にとの事

享保十一年十一月九日

十四日江戸銀子方上田平左衛門守川源左衛門主管ノ銀子多大ノ缺陷ヲ生ス審問ノトキ手子傳兵衛窃取セシヲ白狀セリ平左衛門源左衛門緩怠ノ致ス所ニ由リ逼塞ヲ命ス

十七日瑞聖寺發火吾藩祖先靈屋類焼位牌ハ塔頭慈光院へ遷シ禍災ヲ免ル瑞聖寺方丈へ音信トシテ米貳拾俵進セラル

廿六日正月朔日謁見時限ニ關シ内訓左ノ如シ

來月朔日例年之通御家來中御禮彌御請被成に而可有之候近年は朝御膳々内御手廻組御目見被仰付左候而御膳被召上之御表之御目見被仰付刻限御間合有之儀に付而此度は六ツ時分御膳被召上御座敷御明り參次第御奥之御目見被仰付

相濟直様御表御出被成御目見可被仰付旨候此段内意申達候様との御事

享保十一年十一月廿六日

日不詳奉公人入替ニ關シ訓示左ノ如シ

奉公人入替正月十六日に而候處來年之儀者閏月有之江戸番手之面々出萩無用之奉公人長々召抱置候様にも迷惑の儀に付一統に關正月二日に代り可被仰付との御事

享保十一年十一月

十二月十一日領國內本年早魃虫枯ニテ田島高四万石餘被害アリ大風洪水高潮ノ爲メ損害景況ハ已ニ幕府へ報告セラル

同日濱崎船頭後根長左衛門後根忠七玉江櫻江鶴江夜渡ニ關シ當島代官河野茂兵衛ニ申告セス流例トシテ假手形ヲ以テ沙汰セシハ不法ニツキ逼塞ヲ命ス

十二日島田孫助死去ニツキ閣老北條安房守へ報告ノ爲メ渡邊次部左衛門ヲ出府セシム孫助家臣井上貞右衛門十一月十八日萩發是日着府安房守邸ニ至ル

十三日扶持方成ノ輩家臣上下着用ニ關シ伺定左ノ如シ

御扶持方成衆家來上下着用之願前々無之候處に此度二宮太郎右衛門家來上下着用之儀太郎右衛門より願出有之付享保十一年十二月十三日に毛筑後殿え申伺候處に向後家來上下着用之願有之候は、遠近方承届候上御目付衆へも相知せ候様との儀候尤家來上下着用可被差免候繩張左之通

父母 祖父母 妻 子共 兄弟 伯父 伯母 玄うと 玄うとめ

十四日上關ヨリ海上里程ニ關シ勘定奉行交付書付左ノ如シ

周防國繪圖之内上關より豊後國佐賀關迄海上里數三拾五里と記有之候右繪圖は六寸壹里の積りに候故右之寸を以積り見候得者三拾五里より格別近く貳拾里程にも相見え候就夫繪圖の面之上ノ關有無と里數の書付相違の譯吟味いたし書付可被差出候海上の儀者申傳迄の儀に而不慥成事には候得共以前より所にて申ならはし候里數故繪圖の面え書記候儀候哉右之様子を委細書付可被差出候則元祿年中被差出候國繪圖上關の邊寫候而差越申候

一右 上關より伊豫國三津迄海上里數拾七里と記有之候六寸壹里の積りにて拾三里程

一右 上關より豊後國府内迄海上里數三拾五里と記有之候六寸壹里の積りにて貳拾貳里程

右之通伊豫國三津豊後國府内迄海上里數違候はけ前段の通被相心得書付可被差出候

以上

十二月

答書左ノ如シ

周防國繪圖の内上關より豊後國佐賀關迄海上里數三拾五里と記有之候右繪圖は六寸壹里の積りに御座候故右の寸を以御積り被成候へは三拾五里を各別近貳拾里程にも相見申候由

一右 上關より伊豫國三津迄海上里數拾七里と記有之候六寸壹里の積りにて拾三里

三和十一代史
一同所々豊後國府内迄海上里數三拾五里と記有之候六寸壹里の積りにて貳拾貳里程

右之通繪圖の面上關有所と里數の書付相違の譯致吟味委細書付可差上旨被仰渡元祿年中差上置候國繪圖上關邊寫をも被成御渡委細奉承知候

此段吟味仕候處に右國繪圖に書記候海上里數の儀其所にて前々々申傳候趣を以書記申候海上の儀は船路にて里數も慥には無御座所に申ならはし候を以里數相定申候上關有所其國中儀付繪圖之通相違も無御座候得とも他國えの里數其上海上の儀付て元祿年中に差上候國繪圖に書記候上關々の里數も以前々所々申ならはし候通書上げ申候故陸路里數の様に慥には無御座候
右之通御座候以上

御名内

福間彦左衛門

十二月

十五日公毛利伊勢宅へ臨訪代金貳拾五兩ノ腰刀下付

是時當役中ヨリ訓令左ノ如シ

覺

一御當代未被爲 成面々え 御成之節御料理其外共先格有之尤近年從 公儀段々御儉約の儀被仰出候故其段をも此度少々被加御吟味大概左之通被仰付候御料理の儀御香物共に二汁七菜御肴二種御吸物一ツ御菓子一通間之御菓子一通り可被差上候事

附附後段無用之事

附御三献木具にて可被差上候

御相伴も可爲木具事

附名酒之儀被召上候共二色の外不用意事

附御相伴衆料理 御前同前之事

一御料理物他國え手遣停止之事

一 島臺無用御炭斗三方御盃臺押白木可被相用候此外木具無用之事

一 御膳之上不逮御雛子小謠にて可被相濟候事

一 御膳御献立の儀御臺所頭え可被申付候若相違之儀於有之は御臺所頭越度可被

仰付候事

一 御勝手衆十人に不可過之此外心遣人等二三人迄は可被差免候事

附其屋敷内住居仕者手子付等は可為各別候事

附十五歳以下の者 御目通り不能出通ひに雇候分は不苦候事

一 御供衆料理に御手廻大番は一汁三菜無給以下一汁貳菜酒三篇肴一色輕き菓子

一 色可被差上候尤御膳御残り不被遣且又足輕以下は縁高食煮染酒二三篇可被

差出候事

附御供衆料理鶴鷹鶉雲雀鯉鮭總て高直之初物停止之事

後段極茶停止之事

一 御下付て見舞衆の儀親類たりとも酒飯停止候若諸事の心遣被相頼候は、四五

人の間亭主を相定御目付衆前廉を相達候上酒飯可被差免候事

附御勝手の人數の者は前廉と候ても酒飯不苦候事

附用事無之者見舞候て詰居申間敷候事

附御下當日の見舞停止之事

附魚屋八百屋酒屋菓子屋等其節用事有之者の分は各別候用事無之町人共詰

居候儀は酒飯停止候然し其節召寄被申候町人名付前廉より御目付衆え可

被差出候事

一 御下り五六日以前を御目付衆替るゝ為見聞被差出候事

右之通被仰出候條堅可被相守者也

享保十一年十一月十五日

桂 主 殿

毛 伊 勢

毛 宇右衛門

毛 伊 豆
毛 筑 後

御下付て諸事の心遣被相頼候衆四五人の間亭主を相定御目付衆え前廉を相達候
上酒飯可被差免との儀候然し出頭衆御奥番頭衆其外御役に付前廉を見合入申衆
四五人の分は右見合衆之外に可被差免との儀今日筑後殿兼重五郎兵衛兒玉傳右
衛門え被仰付書記置候事

享保十一年十一月十三日

廿八日左澤百合助君甫十歳公諱字ヲ與へ維廣ト稱ス側儒山縣少助撰定スル所ナリ

奉 考

御本主御性

乙未 金

丁酉 火

宗廣 歸納位 ○大極本善

宗冬ノ韻齒音金行平ノ聲清
ノ第一ノ位

廣唐ノ韻牙一音木ノ行上聲
清第一位

歸ノ納位唐ノ韻齒一音金ノ
行上聲清ノ第一位

右御本性金ノ寸比和ニシテ吉
ナリ御本性火ノ寸火克金ナ
レトモ名字反切ノ例名一ノ字
ヨリ本性ヲ克スルヲハ避之
本性ヨリ名ノ字ヲ克セルヲ
ハ不避

維廣 歸納位 ○大極本善

維支ノ韻喉一音土ノ行平一

聲清濁ノ第四位

廣右記

歸ノ納一位置唐ノ韻喉ノ音土

ノ行上聲清濁ノ第一位

右御本性金ノ寸土生金ニシテ

吉ナリ御本性火ノ寸火生土

ニシテ又吉ナリ

房廣 歸納位 ○大極
本善

房唐ノ韻唇一音水一行平一

聲濁ノ第三位

廣右記

歸一納位唐韻唇ノ音水行上

聲濁第一位

右御本性金ノ寸金生水吉ナリ

御本性火ノ寸水克火不叶

月日不詳吉元公記

旅役出米斗

二月江戸番頭通差紙之事平番ヨリ申出

萩中被定置候馬場之外ニ而賣馬不心得ノ段内意有之

享保十二年丁未正月朔日公萩城ニ在リ

同日此日ヨリ世子百合助君諱ヲ維廣ト稱セラレ

十一日内藤舍人奥番頭本役ヲ命ス

廿二日遠近付安富忠兵衛ヲ手回組ニ加ヘ大田忠右衛門ニ旅役檢使ヲ命ス

廿八日御國留守居毛利宇右衛門廣規ニ江戸加判ヲ江戸加判毛利伊豆廣包ニ御國留

守居ヲ命ス

同日公毛利伊豆嫡子久之允ニ偏諱ヲ賜フ代金壹枚五兩勝家ノ刀下付

閏正月廿五日山田吉兵衛神社奉行ヲ免シ粟屋勘兵衛ニ後任ヲ命ス吉兵衛多年勤績ニ因リ召下羽織下付横山五郎左衛門ニ國司小右衛門代表番頭ヲ有地右衛門ニ粟屋久右衛門代表番頭ヲ完戸二郎左衛門ニ梨羽木工代表番頭ヲ命ス

同日半井古仙壘ニ石州銀負債ニヨリ家人ヲ放チ家祿沒收セラル特旨ヲ以テ歸參ヲ許シ舊祿高四百拾八石六斗九升壹合ノ内高貳百拾石給與財滿五郎左衛門同斷舊祿高三百石ノ中高百五拾石給與神原道與久坂玄龍壘ニ醫業精熟ニツキ其身一代採用セラレシニ數年業務勵精ニ因リ譜代トナシ根帳ニ録シ扶持方四人切錢三百目給與廿六日諸臣功勞ニ因リ加祿昇進新規採用貳百人餘アリ

同日木梨右衛門八曾祖父木梨平右衛門以來四代物頭役本年迄九拾一年勤務ニ因リ銀貳貫目下付

廿八日公款發駕中國路ヲ經テ東觀ノ途ニ即ク陪從加判毛利宇右衛門當役桂主殿手

回頭志道太郎左衛門大組頭日野要人本年ヨリ供從大小臣備道具增加馬上通袋入傘許サル

日不詳諸臣加祿高員額役段下ケニ關シ内訓左ノ如シ

覺

一此度被仰出候御加増高役座の先格有之候へ共御時節柄御所帶凡の御積りも有之付而此度々向後共員數段下ケに被仰付候依之年來御貸被成候員數の内被減之御根帳に被付遣候も有之候事

但被減候殘銀の儀は近年之通にて被遣候事

一了管借々御意銀に相成候員數の儀も右同様の御沙汰筋を以増減差引被仰付候事

右之趣夫々支配々々え内意被仰達候様にとの御事

享保十二未閏正月

日不詳公一門老中へ遺言左ノ如シ

申置條々

一我等至時病死候は、百合助不相變一門を始老中其已下無別心奉公可相勤候百合助忠孝文武の道第一に士民をあはれみ國の仕置よろしく當家相治候様に段々可申聞候事

一公儀御法度相守當家の規堅固正賞罰萬事廉直相心得候様相談し百合助取立候事此時候

一各相和乘議を會し禁止奢侈盡忠誠は可悦也

享保十二年閏正月日 吉元公御書判

二月十三日毛利讃岐守息女増山輝姫正平子長府ヲ發シ參府ノ途ニ即ク同濟冬

十六日飯尾九右衛門ニ養心夫人裏老ヲ命ヌ

十八日周防熊毛郡室津浦閏正月晦日家數貳百貳戸燒亡ノ報アリ之ヲ幕府ニ報ス

三月朔日公着府四日上使十二日登營

十二日庸子吉元公女秋ニ卒ス三歲大照院ニ葬ル法名春峯院

十八日淺草藏火ノ番命セラレ

廿日松平大隅守繼豐室吉元公女皆于江戸芝新馬場邸ニ於テ卒ス廿歲芝高輪泉谷山大圓寺ニ葬ル瑞仙院ト諡ス

同日向後公登營ノトキ西丸へ狹箱一持込ムヘキ通牒アリ

日不詳諸稱ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

諸稱寶永貳年に改被仰付候處に近年猥に相成惡敷稱を用善四郎方仕出候稱をも自分に而掉錘緒なと取替遣ひ候もの有之由善四郎手代々斷申出候條前方被仰出候通彌無相違相心得候様との御事

享保十二未三月

右之通町中在々えも沙汰就被仰付候内意申達候様にとの御事候已上

未三月

四月四日毛利讃岐守匡廣江戸發五月朔日歸邑

五日加判毛利宇右衛門當役桂主殿月切乘輿出願アリ曩ニ乘輿願六人許可アリ七人ノ外允許ナラサルニ因リ主殿ハ六月朔日出願セラル
六日留守居井原市正去々年來勤務歸國ニツキ召下羽織下付
十一日毛利大藏家計窮迫ニツキ引田願ヲ許容セラレ扶持方同前ニテ領地へ住居ノ請願ヲ爲ス依テ命令左ノ如シ

被仰渡之寫

毛利大藏

右勝手向取續不相成且亦家頼育不被得申付至頃日確與差岡被申候間五六ヶ年之間在郷被差免被下之知行所引越堅儉約被仕借銀返濟内證取續之吟味被申付度之由御斷之趣達御聞候處各中の儀は御用有之身分第一例格も無之儀に付旁在郷被差免候様には難被爲成儀に候得共年來の不勝手度々儉約等被仕候而も取續不相成儀候へ共如何様に深く儉約の吟味被仕候ても在萩ことは仕組不相成趣に付御了簡を以如願在郷可被差免之旨候然是在郷住宅の中は諸事平人の御扶持方同然

の居方に被仰付候間家頼の儀は家老を初袴をも著せ不被申年中 御目見其外使者勤等に而も一切 上え之御禮儀とも可被差止候勿論右之通にても伯耆方は只今之通にて可被差置之旨候事

十六日先是平安古安養寺脇ヨリ日野要人屋敷脇へ中道又萩唐樋制札場ヨリ下土原ニ至ル新道ヲ築シム是日竣成ス

十八日ヨリ十九日ニ至ル祐巖院殿七回忌瑞聖寺ニ於テ法會修セラル白銀廿枚米廿俵納付萩東光寺ニ於テ法會執行アリ

廿八日大手三ツノ門相印ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

大手三ツの御門相印申出の裏書物二ヶ月切に而夫過候へは捨りに相成相印突せ不申流例に候得共右之通にては差つかへ候儀有之に付向後は壹ヶ年切に而向月々右之裏書物捨りに可被仰付哉と御手廻物頭衆々被申出其通に相成候依て御知せ申候事

五月十七日小幡源兵衛ニ馬場先夫人裏老ヲ命ス

六月二日役人通旅役ノトキ長柄ノ笠免許及火事ノトキ茂口ニ關シ訓示左ノ如シ

御役人通り旅役の節長柄の笠爲持候儀御儉約に付近年被差留候得共此已後御供

達不時共旅役の節長柄の笠爲持候儀被差免候事

享保十二未六月二日

覺

一

去春被仰出候火事の節の御書付に茂口の儀二之曲輪内え入候儀不苦との儀被

仰出候得共前々之趣も有之に付 御本丸え入候儀不苦との御事

享保十二未六月二日

同日吉川家臣今田伊織逼塞中發狂ニ因リ一族ヨリ請願アリ家柄ニ對シ三百石減少

八百石ヲ嫡孫岩松ニ相續セシムル旨岩國屋敷番ヨリ申告ス

同日泉岳寺建造ニ因リ請願アリ瑞仙院死去以後菩提ノ爲納戸銀之中五拾枚寄付セ

ラル

六日は夜江戸大雷吾郎書院其他諸家落雷アリ

廿日豊前國宇佐八幡社造立ノ勸化ニ由リ銀三拾枚納付

廿三日吉川左京參府十一月五日歸邑

同日夜美禰郡赤郷ニ於テ坂新五郎父藤右衛門ヲ弑ス

同日幸橋夫人取次境忠左衛門辭職ヲ許ス長壽夫人裏老内藤十郎兵衛來春休養ノ爲

メ歸國命セララル、ニツキ代リトシテ内藤五郎右衛門來申春迄勤務命セ

ラル

廿四日公世子左澤百合助ノ名ヲ改テ松平大膳ト稱セシメララル故アリ家中ノ者若殿

トス大膳

トス大膳 廿七日閑老公儀人ヲ招キ國製鍔獻納ニツキ交付書付左ノ如シ

松平長門守

領内ノ鐔隔年ニ被献候右之外ニ鐔貳枚御用ニ候間可被差上候尤献上之鐔師ニ可

被申付候委細ハ御腰物奉行ヨリ可相達候間可被存其趣候
七月十日萩附近御立山ノ制訓示左ノ如シ

覺

松本諏訪ヶ谷ヶ峠迄

一唐人山

小畑切通シヶ猪熊の間

一ぬめり石山

小畑長者屋敷と申所ヶ越ヶ瀨迄の間

一馬ノ鞍山

右椿東分

南明寺上の山

一南明寺山

河内の奥

一戸板口山

坂口ヶ峠迄の間

一倅坂山

河内の上の方に有之

一茶臼山

右椿西分

玉江坂の向

一白水山

楞嚴庵の浴

一牛ころひ山

山田の奥

一足谷山

右山田村

以上拾ヶ所

右の所々は前々より御立山に而候得共此已後別而被入御念番人等被差出手堅制道被仰付若不小心得の下々右御立山え入候もの於有之は見當り次第召捕候様地下山廻りのものともへ被仰付候條此段家來下々え急度被申付候様内意被相違候様との御事

享保十二未七月十日

十一日他國酒入津之制訓示左ノ如シ

他國酒入津の事被相制候處諸士中入用の醬油酢油等通ひ瀬戸崎赤間關三田尻其外方々々取越紛候而見分難成由申出候付若不審の儀於有之は具に相尋趣次第内實見分をも仕候様に被仰付候條此段内意申達候様にとの御事

享保十二未七月十一日

十二日大組桂庄左衛門に香原喜右衛門代馬場先夫人大檢使ヲ命ス

十七日來年四月將軍日光社參發表ニ因リ關老ヨリ諸大名登營献品ニ關シ書付交付

アリ

十八日公登營日光社參ヲ祝ス廿七日樽三荷肴三種献セラレ

八月三日例年十月進献ノ银杏鯖切漬ニ交換伺書左ノ如シ

松平長開守國元の産物银杏一捲宛毎歳十月爲伺御機嫌献上仕來候然處に近年不出來に而其上年に依り遅き儀御座候故右银杏の代りとして向後十月國元の鯖切漬一臺宛献上仕度奉存候依之奉伺候以上

八月三日

御名内

末近九左衛門

加紙

伺之通献上候様に可被致候

五日伊藤彦右衛門同清右衛門奴新五郎父藤右衛門并下女殺害ニ關シ不届アリ逼塞ヲ命ス

六日天野舍人ニ福間彦右衛門代表番頭ヲ大和四郎左衛門ニ神村又左衛門代表番頭ヲ命ス

十七日萩城二ノ曲輪城濠三所累年悪水注流ノ爲塵芥堆積セシニ因リ浚渫願認可アリ

廿一日大組鐵砲頭井上清右衛門組中負債ニ關シ不正ノ行爲アリ免職隠居ヲ命ス

廿八日大檢使坪井彌左衛門大組ニ加ヘ幸橋夫人取次役ヲ命ス

九月八日大組田坂半左衛門遠近山縣一郎兵衛大檢使役ヲ命シ手回組ニ加フ

九日公歸國ニツキ留守居井原市正著府

十一日福嶋五郎右衛門麻布郎在勤ヲ命ス廿四日黒印ヲ授ク

日不詳一季半季ノ女奉公人給金ニ關シ内訓左ノ如シ

覺

一季半季の女奉公人年增高恩罷成之由相聞候今程諸物下直の時節に候得は前々引下ケ可申儀を高恩望候段不謂儀候若高恩の奉公人相抱候衆於有之は依品主人も越度可被仰付候尤奉公人の輕重も可有之候得共其相應を以近年の恩銀引下ケ吟味仕被相抱候様に内意申達候様にとの御事

享保十二未九月

十三日阪新五郎斬殺ノ罪ヲ裁決ス三日間萩市街ニ肆シ大屋ニ於テ磔刑ニ處ス同日御米方ヨリ月々給與ノ扶持方欠米ニ關シ訓示及裏判役ヨリ藏元兩人役へ訓示等左ノ如シ

御米方々々御勘渡の御扶持方米等餘分へり有之馬郎の致方不宜儀歟と相聞候依之送りの儀入念候様重疊沙汰被仰付候得共猶又餘分の不足相立候は、支配方え申出候やうに内意申達候様にとの御事

享保十二未九月

覺

一御藏元於御米方御拂相成候御扶持方其外御切手米御役料等の勘渡米へりかん強諸人令迷惑之由相聞候付而段々吟味被仰付候此度御詮議の上拂米俵別掛廻し被仰付同様の貫目有之候俵を撰分け一列にして右の俵數圖當にして其當り俵を現廻しにして殘俵右の當りを以拂方可被申付候事

一俵別懸廻し仕候節百目の内外貳百目までの輕重は一列に可仕事候俵拵の仕立にては百目貳百目の輕重は可有之儀と相聞候貳百目に過候輕重有之候は、撰分け列を違へ候様可有沙汰候右の通に相成候得は大概へりかん立候儀は無之筈の事

附請の御米御藏入不仕内直様於請場令拂方候時は格別懸過の不及沙汰請候時の懸廻辻を以貫目の輕重一列に定可令拂方候事

一馬子共御拂米を請取先きく送り届候節途中に而盜取又は手工郎等仕候段前廉も度々有之たる儀も今以いかやうの手工郎等仕候哉も難相知事に候右の通に御拂の筋沙汰被仰付候上は此已後へりかん立候儀は無之儀に候へ共猶以此已後は紙札に御拂米員數俵數根廻半米尤拂先之名送り届候馬郎之名月日をも書付馬郎肝煎之印判を突馬郎共え相渡右之紙札を相添米送り届候様に被仰付候左候而萬一へりかん其外何そ手工郎かましき儀も有之候は、右之紙札を以拂先より申出候様にと支配くえも沙汰被仰付置候條申出有之上右送り届候

馬郎之者穿鑿申付一廉曲事に可被仰付候事

一右之紙札相整候儀は馬郎肝煎之役儀に可被申付候馬郎共手工郎等不仕様に可仕段者馬郎肝煎馬郎横目之役座第一之事に候然者何そ手工郎之儀於有之者此已後之儀は札明之上其品により肝煎横目共に曲事に可被仰付候條能々可被申聞候事

右之通に被仰付候條随分繕り能可有沙汰候已上

享保十二未九月十三日

渡 小 三 郎

江木與一右衛門殿

生田伊右衛門殿

何某様分

米何石何斗何升

但俵數いか程四斗何升廻し

半物何斗何升

何月何日

馬郎

何左衛門

右御米方御勘渡米有之付餘分之欠米有之節は被申出候様にとの儀は先達而内
意申達通に候然は御米方え御拂之致方御仕法被差出候間是又爲心得連々通達有
之候様にとの御事

九月十五日

十五日阪藤右衛門跡養子新五郎父藤右衛門ヲ殺害セシニ因リ跡職ヲ命セス家祿沒
收

十六日公歸國暇ヲ賜フ將軍ヨリ閔老水野和泉守大納言ヨリ安藤對馬守大納言ヲ使
付老中トシ賜物例ノ如シ

廿一日馬場先夫人裏老小幡源兵衛著府ニ因リ同役諫早七郎右衛門ト交代セシム
廿八日公江戸發駕

日不詳目安箱ヲ大坂町奉行所ニ設ク徳川實紀

十月日不詳諸臣屋敷家作申告ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

御家頼中屋敷家作其外作事に付外輪圍之儀前々は本人申出之書付に組頭衆與判
を以御客屋え届來候得共向後は組頭衆與判に不逮本人ヲ町奉行え對し覺書を以
直に被相届候様に申達候様にとの御事

享保十二未十月

十六日足輕以下組代肝煎相組過分出銀禁止及足輕以下扶持切米組々へ受授ニ關シ
遠近方告示左ノ如シ

覺

足輕御中間以下諸組共組内之用事に准へ組代肝煎共令參會料理等給相右入用相
組中出銀致させ候儀有之總而一組年中之入用大分之儀にて人別之出銀過分に
仕年々及迷惑之由相聞候組代肝煎としては相組中勝手取續之儀苦勞に仕萬端令
心遣候段勿論之事候處に疎略に罷過剩相組之造作を以准へ事之參會等仕候段組

代肝煎共心得甚不謂儀且は組頭支配人も無沙汰之儀候然自今年中之諸入用與頭支配人委細に僉議被仕過分之出銀無之尤與代肝煎共准へ事等不仕様に手堅可被申付候右之趣御目付衆に見聞被申付候様に被仰付候間此上若不心得之儀於有之は組代肝煎共一廉曲事に被仰付依品與頭支配人も可爲越度候間此段各々相達候様にとの御事

享保十二未十月十六日

齋藤伊右衛門

山縣市左衛門

覺

足輕御中間以下御扶持切米於御藏元勘渡之節は組代共罷出請取配當仕筈に候處に大形馬郎共相頼請取せ支配致させ其外渡方不締りの儀も有之少宛の御扶持切米の内かん米多有之由相聞候此段組代共疎略之致方甚不心得之事に候此度御米拂方之仕法被相改不相應之かん米は無之様に被仰付候條組々え請取配當仕候儀組代共念を入疎略之儀不仕廉直に渡方仕候様組頭支配人々手堅被申付候様にと

の御事

享保十二未十月十六日

齋藤伊右衛門

山縣市左衛門

廿日獲ニ國元ノ鑄將軍ノ好ニ因リ不時献進アリシニ閱老松平伊賀守公儀人未近九左衛門ヲ招キ細工人二人へ褒美トシテ銀子五枚宛ヲ賜フ

廿一日長府領四月下旬ヨリ八月下旬迄早魃ニテ田畑被害景况幕府へ報告左ノ如シ
高九千貳百八拾石八斗三升貳合

内

七千貳百三拾四石八斗四升二合

田方

貳千四拾五石九斗九升

畑方

廿三日公歸封ノ途次岩國ヨリ前例ノ如ク左京母子ヨリ使者ヲ以テ候問スヘキニ左京母子忌服中ニツキ勤禮遠慮スヘキヲ藝州西條驛公旅館へ使者ヲ以テ申報セリ
廿四日頼母子開始ニ關シ内訓左ノ如シ

今度被仰出候頼母子銀并御貸銀之儀内證且々作廻も相成入用無之衆も候は、勝手次第に可被差除候其内頼母子計は人数に相加り御貸銀は入用に無之衆有之候は、是又勝手次第に可被仰付との御事候條内意申達候様にとの御事

享保十二未十月廿四日

廿八日公歸城世子大膳君獅子廊下ニ之ヲ迎ヘラレ同道ニテ對面ノ間ニ入り著座是時公歸途徳山館ニ到リ饗應ヲ受ケラル

同日歸城禮使粟屋與三左衛門出府セシムルニツキ召下呉服下付

十一月朔日公諸臣ニ謁ヲ賜フ

五日日光山供從ノ輩雇人賃銀及武士方奉公人辻番等ニ關シ閱老交付書付左ノ如シ

覺

一來年四月日光御供之面々御當地町方ハ雇候駕籠之者并諸日雇賃銀之儀一切高直に致間敷旨町方え相觸候日光迄參候直段書兼而取置たる雇候面々其心得にて可相雇候若過半賃銀高直に致候もの有之候は、町奉行所え其段可被相達候

奉行所にて吟味有之筈に候事

一武士方一季居之奉公人來年三月迄之極に候共主人勝手次第唯今之請人にて其儘召仕候筈に候間主人ハ暇出し候儀は格別奉公人ハ暇取候儀仕間敷旨町方え相觸候間其旨可被相心得候若致違背候もの有之候は、其段町奉行所え可被相達候右は御供御留守の面々も同前之儀に候事

未十一月

右之通可被相觸候

武士方組合辻番之儀只今迄之請負相止候前々之通組合相對にて請負辻番人可被可申付候年番月番之儀は組合之申合次第唯今迄之通たるべく候向後組合之中頭取壹人可相定候其頭取は差置候辻番人共之儀遂吟味老人又は病人體之者不差置諸事不作法無之様に可被申付候委細之儀は小笠原平兵衛松浪甚兵衛え可承合候

但頭取之面々は年番月番仕に不達候

右之趣諸向え可被相觸候

十一月

十五日大納言前髪ヲトラル廿八日公飛札ヲ以テ之ヲ祝セラル
廿一日諸臣儉約ニ關シ訓令左ノ如シ

覺

御家來中數年之困窮に付て去る辰之年種々御仕組を以旅役出銀之外御馳走米被返下借銀調方之儀も其仕方被仰付以來大小身共に一分ノ覺悟を以取續仕候様と被仰出候然處年來之困窮又は米穀之價下直故にて候哉無程差つかへ候趣に付此度勝手取續之吟味被仰付近年之添狀借も片付申儀に候得は此上之心得肝要之事候若當分之勝手のみ相心得少々取續も仕能様に被存還て儉約之緩せにも相成候ては其心得違之儀候尤近年儉約之儀段々被仰出表向は相立候様子に候へ共内輪之儀におゐては儉約を不用無益之費を仕不覺悟之衆も有之様に相聞候間向後之儀彌以内外共に儉約無緩諸事面々之吟味を以勝手可被取續候乍此上自然

不心得之衆も於有之は御目付衆えも被仰渡儀に候條被得其意右之趣組支配中えも能々可被申聞候以上

享保十二未十一月廿一日

廿二日公玉江別邸ニ臨ミ朝鮮人ヲ觀ル

廿四日寧姬吉元公筆初幸橋夫人へ契約成ル

廿六日神事佛事ニ關シ閣老交付書付左ノ如シ

於在々所々神事佛事其外不依何事新規之儀堅不可取建若無據子細有之は奉行一所又は地頭え相達可任差圖縱令有來候儀にても例に替たる品不可仕候右之趣堅可相守若違背之輩有之は其所之名主年寄等急度可爲曲事候以上

未十一月

一今度神事佛事之儀に付て別紙之通從 公儀御書付被差出候付寫拜見被 仰付候然は自今新規之儀は不逮申有來儀にても享保元年以來相勤候神事佛事之儀向後被差留候間可存其旨候自然無據儀有之於申出は品によつて可被差免候事

一於神前舞神樂湯立等は唯今迄之通たるべく候事

附常念佛永代經之儀も右同前之事

附寺社所帳面に無之神社之儀は舞神樂湯立等一切祭事被差留候事

右之通被 仰出候條被得其意組支配えも堅可被申聞候以上

申七月

桂 主 殿

毛 伊 勢

毛 宇右衛門

毛 伊 豆

毛 筑 後

廿八日御國留守居毛利伊豆廣包ニ江戸加判ヲ江戸加判毛利宇右衛門廣規ニ御國留守居ヲ命ス

日不詳日光觀音院ヨリ請求アリ金五拾兩寄贈セラル來年四月將軍社參ニツキ修繕ヲ要スルニ依テ也

日不詳頼母子開始ニツキ扶持方成ノ輩借銀ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

此度御家頼中え頼母子一番取并御貸銀をも被仰付候得共御扶持方成衆之儀は御役目をも不被仕儀に付て不逮御沙汰候然共近年借銀納寄せ被仕今暮調切之衆亦是來暮來々暮迄調切之衆殘借銀年賦等に被相斷銀主納得之上罷出相勤度衆於有之は御了簡を以高百石に貳百五拾目宛之御貸銀をは可被仰付候勿論頼母子之儀は割方相濟候儀に付て彌不及御沙汰事候間右之趣を以面々内證之作廻被致吟味勝手次第被願出候は本知被返遣組戻可被仰付候事

但當月二十五日を限可被申出候事以上

享保十二未十一月

十二月七日毛利讃岐守息女増山 正室増子死去廿日ヨリ廿二日ニ至ル萩地鳴物停止

十一日防長ノ内春來大風旱魃洪水ニテ被害景況左ノ如シ

高五萬石餘

土手石垣井手川除等壹萬間餘

寺壹宇

十二日尾越五郎兵衛ニ幸橋夫人裏老ヲ命シ三隅勘右衛門ト交代セシム

十五日大組頭有地右衛門内藤善兵衛多年勤績ニヨリ米八俵下付

廿五日阪新五郎へ關係ノ輩賭博犯罪顯レ伊藤彦右衛門外廿一人減知沒收等處罰ア

リ

晦日國司又右衛門數年勤績近年大頭所苦勞ニヨリ金拾兩下付郷田宗格數年西御殿

ニ付セラレ今ニ出勤苦勞ニツキ銀拾枚下付

月日不詳吉元公記

朝鮮人送之節道筋細工町片河町吳服町大廻リニ相成候事當年ヨリ始ル

毛利十一代史卷之五十六

大田報助編次

泰桓公記十六

享保十三年戊申正月朔日公萩城ニ在リ

九日稻葉修理養子右近死去毛利讓岐ノ報アリ廿二日ヨリ廿四日ニ至ル萩地鳴物高

聲停止

十六日法乘院監物元重妾毛利阿波元直母死去毛利伊勢祖母ノ忌服ヲ受ルニ因リ使

ヲシテ弔問香銀三枚下附

廿日日光社參留守中川筋船改及船頭舸子脇差ニ關シ閑老交付書付左ノ如シ

一日光御社參御留守中川筋御船手より船改之儀大名之船は兼て留守居より判鑑

取置斷次第手形引合相改候事

一手負繩付並武具之類不相通候事

一出家女並前髪有之者其支配方より手形取相通し候事

右の通万石以上へ可被相達候爲心得万石以下老中支配の分へもより可被相達置候

正月

諸大名手船之水主脇差帶候儀扶持人は各別荷をつみ候船の雇舸子は向後脇差帶申間敷候但船頭の儀は諸事差引等をも仕事に候へは雇の者にては勝手次第刀帶可申候

正月

廿四日本多兵庫請求アリ今ヨリ五年間年々金貳百兩宛合力セラル

廿五日當役桂主殿辭職留任

二月四日ヨリ五日ニ至ル弘元公三百年忌山口大通院ニ於テ法會修セラル公及大膳

君名代惣奉行益田越中

七日毛利但馬守廣豊徳山ヲ發シ三月二日著府

九日福岡藤右衛門公儀人ヲ免ス

二十七日我芝田町貳丁目町並屋敷地面九百三十二坪六勺七才芝口一丁目七郎兵衛へ讓與ス代價金百五十兩也

廿八日飯田源右衛門大檢使ヲ免シ勤方安田佐左衛門ニ後任ヲ命ス

三月朔日添狀紙改正ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

此度添狀紙改被仰付候付新添狀紙諸組へ渡方被仰付候依之諸組共に新添狀紙相調去暮以來差出有之候添狀引替相成儀候間當月十五日より四月中を限只今迄の添狀支配所へ差出新添狀引替可仕候右之日限延引不仕差出候様にとの御事

享保十三申三月朔日

同日當職毛利筑後辭職留任御差料脇差代金五枚添狀物三紙下附

二日大納言吉宗將軍嫡男砲術ニツキ諸大名惣出仕十三日藏掛與兵衛ヲ出府セシメ

使札ヲ呈ス

八日大納言疱瘡酒湯式ヲ祝シ二種一荷ヲ献セラル廿三日使札ヲ呈シ之ヲ祝セラル
十二日三月六日岩國領柳井津鍛冶町ヨリ出火家數百七拾五戸焼亡之ヲ幕府ニ報ス
十八日三十人通笠井孫右衛門嫡子源右衛門百姓三之允慮外ノ行爲アリ之ヲ殺害セ
リ因テ源右衛門ニ先逼塞ヲ命ス糺問ノ結果三之允慮外判明シタルヲ以テ源右衛門
ノ罪ヲ問ハス

十九日ヨリ廿日ニ至ル瑞仙院一周忌大照院ニ於テ法會修セラル
廿八日岸小兵衛襲ニ藏元吳服方勤務中不法アリ追放命セラレシニ齡八十二達シ歩
行ニ惱ミ飢餓ニ及フ最上青彌小兵衛ヨリ詩願アリ瑞仙院法會ニ對シ國內出入ヲ許
サル

廿九日ヨリ晦日ニ至ル有章院殿將軍宣十二回忌山口氷上山眞光院ニ於テ法會修セラ
ル名代福原豊後公參拜四月朔日山口ヨリ歸城

四月六日八谷五兵衛手元役ヲ免シ山縣市左衛門ニ後任ヲ命ス
十三日吉宗將軍日光社參江戸出發廿二日歸城三家以下惣登營

十六日山縣藤助右筆ヲ免シ大組ニ加ヘ遠近方ヲ尾寺長左衛門ニ藤助代右筆本役ヲ
市川三右衛門ニ粟屋半左衛門代町奉行ヲ飯田六郎兵衛ニ江木與一右衛門代藏元兩
人ヲ三戸與右衛門ニ遠近方ヲ命ス齋藤伊右衛門遠近方ヲ免ス白井友之進ニ赤川又
兵衛代上關代官ヲ波多野市兵衛ニ河野茂兵衛代當島代官ヲ命ス
廿二日大膳君始テ玉江別邸ニ至リ廿四日歸城

晦日閏老松平伊賀守死去五月朔日ヨリ三日間鳴物停止五月十九日公閏老へ候問書
呈セラル

五月四日毛利但馬守神田橋見付番命セラル
六日内藤作兵衛ニ大膳君兵法指南ヲ命ス

十四日松本作左衛門ニ所帶方副役ヲ命ス
廿二日少老大久保佐渡守閏老ニ任シ壹万石加祿ニ由リ飛札ヲ提出シ太刀一腰馬代
黃金十兩ヲ贈ラル

廿五日城溝釣魚ヲ禁止ス令文左ノ如シ閏老交付

市谷御門より牛込御門迄の間御堀にて近年猥に魚釣候者有之由聞候殺生
御制禁之高札も有之所に不届の至候此以後右の場所にて魚釣候者於有之は急
度可申付候右の趣諸向へ可被相觸候以上

五月

廿六日明倫館在勤儒者山縣治右衛門齡八拾一歳辭職ヲ許ス

六月八日厚母助右衛門勤番滿期歸國ノトキ大坂ニ於テ發狂自殺ヲ謀ル因テ假養子

粟屋七郎左衛門三男八之助へ高五拾三石ノ内六石ヲ減シ殘高四拾七石給與

十一日春宮立坊ニツキ京都へ祝使酒井雅樂頭ニ前例ヲ以テ壹種千匹贈ラル

十二日萩地大雨洪水川嶋堤防破潰唐樋町浸水家屋橋梁被害若干

廿一日春宮立坊ニツキ諸大名惣出仕使番三浦七兵衛ヲ出府セシメ使札ヲ以テ祝セ

セラル京都諸司代へモ使札ヲ呈セラル

廿二日毛利但馬守勅使參向饗應役ヲ奉シ神田橋見付役ハ同僚へ授受ス

廿五日東光寺松本川ニ於テ水燈施餓鬼ヲ修ス長慶寺ヨリ東光寺へ依頼ノ法會ニツ

キ向後禁止ノ旨長慶寺へ内訓アリ

日不詳手回組足輪御鐵炮ノモノ訓令ニハ名字ヲ除クト訓示セリ

七月四日幸橋夫人有馬佐衛門分姫子ナ

十二日辻相撲辻躍ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

一 相撲躍今年も近年の通心次第御構ひ無之候尤物切の儀は先不逮汰候事
一 火用心の儀兼て被入御念儀候間おどり相撲場所近き人家の垣壁其外にてもた
はこの火なと龜相に仕間敷候若相背者有之候は急度曲事可被仰付候尤御目付
衆其外見分の役人中へも手堅其沙汰申付候事

享保十三申七月十二日

十六日領國內五月廿七日六月六日同十二日洪水被害景况幕府へ報告左ノ如シ

一 高三萬九百石餘

内壹萬三千四百石餘永荒

一土手石垣井手川除拾萬七千間餘

一 道筋千六百間餘

一 山崩四千貳百參拾七ヶ所

一 落橋四拾九ヶ所

一 流家八拾四軒

一 崩家貳百六拾壹軒

一 倒木三千貳百五拾本餘

一 溺死拾人

內男七人
內女三人

一 怪我人三人

內男壹人
內女貳人

一 死牛貳匹

十八日平岡善兵衛平岡半之允心亂之ヲ幽閉シ渡邊助兵衛養子小助ヲ歸家相續セシ

メタリ善兵衛村上喜兵衛宮原七郎三郎ヨリ出願ノ件違法タルヲ半之允母ヨリ苦訴
セリ審問ノ結果善兵衛逼塞ヲ命シ知行高ノ内四拾石減少喜兵衛同五拾石減少七郎
三郎同拾銀ノ内貳拾目減少其他關係ノモノ處罰アリ
六日藝州吉田元就公席番喜右衛門廂所修理ニツキ申告ノ爲メ萩ニ來リ芋壹折献ス
客屋ニ於テ料理ヲ賜フ喜右衛門ヨリ提出書及喜右衛門へ命令左ノ如シ

覺

一元就公御廂所へ被差上候御香奠銀先年被下置候故其後利銀共相加り少々餘分
にも罷成候に付近年存立廣島表へ願仕り

御廂の廻り取繕入用に仕候處左の通御座候

一 御石燈籠貳本 但高サ七尺
二重サニシテ

一 御花立壹對

一 御臺石壹ツ 但長三尺五寸
但泊壹尺五寸

一 御敷石 但長五間
但泊六尺かづら石トモ

一御手水鉢壹ツ 但長四尺高貳尺

一石段長六間 但厚七寸

一夫八拾人 但大御切石品々取夫

一夫五百八拾七人 山かけへ築出し入用夫

一夫八百三拾壹人

往還より御廟所へ丁間凡五町石垣并取繕石入用夫

一夫六百七人二歩

大石垣并道調夫

貳千拾四人貳歩

右御廟所道筋餘り損し居申候取造り直し申所如斯御座候今度私罷下り申候故乍恐有増申上候以上

藝州吉田村

享保十三年申七月

喜右衛門印

喜右衛門へ被仰聞候書付如左

藝州吉田村

喜右衛門

右洞春寺殿墓所へ先年此方より被相備候香奠銀貨付置候て利銀相加り少々餘分にも罷成候に付て近年存立數多の人足を用墓所廻り取繕燈籠其外相調候段神妙の儀候右墓所の儀は年來有かゝりにて相濟たる事候へは今更取繕候に會て不及儀候ヶ様段々再興仕候様に有之候ては以來持方も如何敷此方存念に難相叶候條自今は墓所廻り佛具等少々儀と候ても一向取繕候儀堅無用に可仕候然上は此先香奠等被相備候とても早速私用に可仕候此段重疊可相違之由に候將又墓所廻り掃除の儀は只今迄の通に仕候様にとの事

二十日中山與一兵衛櫻江御立川ニ於テ漁獵セシニヨリ逼塞ノ後隠居ヲ命ヌ大中市

左衛門弟貞右衛門過料ニ處ス

廿六日財滿新右衛門ニ曾禰三郎右衛門代表番頭ヲ命ス

廿七日飛石十兵衛馬來采女ヲ伴ヒ御立川ニ於テ漁獵セシニヨリ逼塞ノ後家祿十分

一減少隱居ヲ命シ殘高ヲ嫡子ニ相續セシム馬來右衛門嫡子采女ニ逼塞ヲ命ス

廿八日兼重五郎兵衛ニ麻布邸在動ヲ命ス

日不詳新地ノ寺社建築制禁訓令左ノ如シ

一新地の寺社建立諸國一統堅御制禁の儀候然處元祿年中御改以後御斷をも不申

出於在々新規に社令建立と相聞甚以不謂事候依之有來と候ても寺社所帳面に

無之神社の儀は向後不可加修理尤唯今不逮取拂候若又自今小社にても新規に

造營仕にをいては早速破壊被仰付之取建るものは一廉可爲曲事候事

一古來の社速大破造替仕候節坪敷を増結構の造營停止被仰付候然上は新古の差

圖を以て奉行所へ申出成就の上引合可請見分候事

一火災大破等にて早速造替不相成分は古社差圖を以寺社奉行へ相届裏書取置追

て再建仕節右の差圖相副奉行所へ可相願候事

一此度の御制法被仰出候以前焼失又は及大破取拂置候社無據再建令延引候分有

之證據於無紛は十五ヶ年以來の儀は最前の差圖相添申出候は、僉議の上可被

差免候事

一寺院の儀は近年被仰出候辻彌以無相違事

右の通被仰出候條被得其意組支配へも可被申聞候以上

享保十三年

八月

桂 主 殿

毛 伊 勢

毛 宇右衛門

毛 伊 豆

毛 筑 後

九月朔日佐世大學ニ手回頭ヲ命シ志道太郎左衛門榎本彈正三人役ト爲ス彈正へ來

江戸陪從ヲ命ス太郎左衛門大膳君へ附セラレ手回頭都合役ヲ兼務セシメ大膳君來
三月初テ出府ニヨリ供從ヲ命ス大學ニ留守ヲ勤務セシム
二日江戸洪水

神經讀誦替者官位院號禁止ニ關シ閣老交付書付左ノ如シ

地神經讀盲目官位院號袈裟衣御停止の儀先年被仰出候處に遠國にては猥に成候
と相聞へ候間向後在々所々に至迄猥に無之様急度可被申付候以上

九月

徳山中山居住地神經讀盲目清朝ナルモノ放逐命令左ノ如シ

毛利但馬守領分

地神經讀盲目 清朝

右ノ盲目地神經讀候儀ニ付相願候ニヨツテ青蓮院御門跡ヨリ院號袈裟衣等免許
候ノ處右免許狀ハ追テ被取上候由候得共急々御停止ニ候處不届ノ至候間所拂可

被申付候以上

九月

五日益田越中煙火ヲ献ス是夜大筒屋ニ於テ看覽

九日公臨駕ノトキ訓示及遠近方ヨリ目付へ告示左ノ如シ

御成の節被差出候御書付の儀前々江戸方より被差出來候得共此度より不被差出
遠近方より沙汰仕候様にとの儀候然共向後

御成被成候段不相知候ては沙汰不相成儀候間度々の趣被申越候様にと尾寺長右
衛門方へ三戸與右衛門申達候處御成の節度々物音可仕との儀候事

享保十三申九月八日

今度桂主殿山内縫殿へ被遊 御成に付御書付被差出候前廉浦圖書殿へ

御成の節被差出候通相違無御座に付此度は御書付寫不被差越候條左様御心得可
被成候

以上

九月九日

三戸與右衛門

山縣藤助

兒玉傳右衛門様

十三日大膳君春日祭祀流鏑馬ヲ看ル

十五日藏元兩人役生田伊右衛門ニ檜崎吉右衛門代大坂留守役ヲ山口代官福原二郎

右衛門ニ生田伊右衛門代藏元兩人役ヲ清水右衛門二福原二郎右衛門代山口代官ヲ

命ス

廿日毛利甲斐守神田橋門番命セラレ

廿六日牛車大八車地車及荷付馬等ニ關シ大目付回狀左ノ如シ

覺

牛車大八車地車并荷附馬等引通り候儀往來之障りに不能成様に前々も度々相觸

就中去る寅年急度相觸候處近き比又候猥に相成往來之人をよけ不申我儘に引通

り候付頃日も神田佐久間町壹丁目久次郎店仁兵衛神田相生町傳右衛門店清六と

申者兩人から車を引牛込拂方町通り候節同町四兵衛忝新八と申十五歳成候者へ

車を引かけ新八相果候畢竟先年より度々觸書の趣忘却致候故の儀旁不届至極に

付仁兵衛儀は死罪清六は遠島被仰付候自今車引馬士等此趣を急度相守可申候此

以後往來の者へ我儘致怪我人等於有之は當人共は重き御仕置被仰付人被召仕に

ては其主人并家主五人組名主迄夫々に御咎可被 仰付候履ひ候者方にてても念を

入候様に彌可申付候龜末の儀も候は、可爲越度候此段町中地借り店借召仕等迄

委細に可觸知者也

右の趣町中へ相觸候にと町奉行へ申渡候間面々家來下々等へも彌急度可被申付

置候以上

九月

廿七日使番二宮源右衛門ニ目付役ヲ命ス

廿八日厚母惣左衛門ニ大膳君邸頭人ノ手元役所帶都合臺所頭兼務ヲ命ス

十月二日坂九郎左衛門手元役ヲ免ス

三日大膳君玉江別邸ニ於テ繰ヲ觀ル

四日毛利主水正親江戸ヲ發ス

五日村上亦右衛門ニ用談役ヲ命ス表番願格ニテ大座

當役用談始る桂廣保役中村上又右衛門常忠十月五日より同十四西十一月十一日迄所勤其以後於于時有之

七日大坂城代酒井讚岐守閑老ニ任ス使札ヲ以テ太刀金馬代二種千匹贈ラル

九日毛利讚岐守甲斐守ト改名公許アリ酒井讚岐守ニ碍アルヲ以テナリ

同日ヨリ十日ニ至ル常憲院殿廿一回忌十三日ヨリ十四日ニ至ル文照院殿十七回忌

山口水上山ニ於テ法會修セラル名代益田越中是日公山口ニ赴キ湯田湯治廿四日歸城

十五日拾ヒ物ニ關シ訓示左ノ如シ

拾ヒ物有之下より申出候節前々は其時々被相觸候處支配所諸觸多令迷惑由相聞候付觸之儀被差止之三十日を限其段申出候様にとの儀先年御沙汰有之處に其後

ひろひ物の品によつて被相觸候儀も有之區々に相成候付て向後は右の趣に被改之拾ヒ物有之下より申出次第其譯札に書記唐樋札場平安古橋際右兩所へ被差出凡三十日を限物色申出候様被仰付於無相違は可被渡遣候間右札の趣に隨ヒ物色旁無相違時々申出候様にとの御事

享保十三申十月十五日

十一月二日使番山名惣右衛門ニ目付役ヲ南方亦八郎ヲ手回組へ加へ使番ヲ命ス

四日大膳來年夏中出府伺書土井新右衛門御方也ノヲシテ幕府へ提出セラレシニ任意タルヘキ台命アリ

六日毛利但馬守徳山附近宗家領ニ於テ銃獵ノコト當役へ照會アリ前年毛利讚岐守

清末附近宗家領ニテ狩獵ノ例アルヲ以テ隨意タルヘキノ回答ヲ爲ス

七日ヨリ八日ニ至ル高政夫人五十回忌龍昌院ニ於テ法會修セラル

十一日四役ノモノ採用ニ關シ地江戸老臣駕籠奉行へ訓示左ノ如シ

覺

一御小人之者新規に被召抱候時は足輕以下御中間通り之者之子供兄弟を限人柄次第可被召抱候事

附又内侍分之子供兄弟共肩を不崩ものは是又新規に可被召抱候事

一御道具御挾箱之者の儀も右同様之筋目之者可被召抱候雖然長恰好能健成者を被撰儀候へは當分共肩を崩し渡世仕候とも右の筋目於無紛可被召抱候事

一御駕籠之者之儀は町人百姓たりとも長五尺七寸以上にて恰好宜敷もの可被召抱候事

右四役之者之儀當番被仰出候通御小人は横山靜間兩組以上御道具御挾箱御駕籠之者之儀は近藤天野仲屋組より可被召取候若又右の與々にも相應のもの無之候は、支配與并數年相勤候御雇の内相應のもの於有之は可被召出候御時柄の儀候へは容易に御家人相増候様難被仰付候間御手人撰候節は大概の人柄をは先被召取御駕籠の者の儀も長少々不足仕候共一旦相勤させ候上御用に不相立候は、與戻り可被仰付候兎角相應のもの無之に相極候は、新規に右に有之筋目の者尤義

も歳若く往々御用に立候もの可被召抱候萬一筋目相違仕候段後日於洩聞は年序を經候共被召放尤存知の役人無念に可被仰付候以上

享保十三申年十一月十一日

桂主 殿印列
毛筑 後印列

十八日毛利伊勢元雄御國留守居ヲ免ス

廿一日林三郎右衛門慶長九年ヨリ本年ニ至ル百二十五年間高祖父以來五代物頭役勤績ニツキ銀貳貫目下附

同日毛利宇右衛門家臣神代市右衛門領地ニ於テ大鷹ヲ捕へ献スルニヨリ銀貳枚下附

十二月五日三十間四丁目北角ヨリ四軒目表口京間十二間裏行並貳拾四間餘家屋鋪並岸付土藏二所同所新道表京間十四間口裏行町並五間三尺五寸ノ家屋鋪購入セラ
ル代價金千兩也

十九日稻葉修理正方元毛利元知三男稻葉霞ケ關安藝守邸前ニ於テ落馬シ馬ハ吾藩邸

門前ニ止ル修理負傷重シ同夜櫻田邸ニ於テ死去四十九廿四日泉岳寺ニ葬ル公記

三家年表十二月廿二日元知男稻葉正規正員初正卒四十九法名乾德院葬於麟祥院

廿八日井上六郎右衛門ニ公儀人ヲ命ス

月日不詳吉元公記

他家養子二三男遣ノ以後嫡子死去等ノ節家續人無之時ハ養家ニテ本人ニ相成候

以後ニテモ家元家續人無之時ハ格別ニ養子相願其身ハ家元引取候儀相成候由其

以後右様ノ儀被差留候由此頃歟

熊谷町筋田町ヨリ新堀へ至ル道出來

旅役出米計リ

享保十四年巳酉正月朔日公萩城ニアリ

十八日世子大膳君始テ着甲冑志道太郎左衛門甲上ノ役ヲ勤ム緒方仲助後見タリ

同日世子宮崎社ニ詣ス是日世子馬乗初檜崎四郎兵衛手綱ヲ上波多野孫惣助手タリ
兩人鬪斗目半上下ナリ

廿日在々用水掛引井路并郡村境界山野論所ニ關シ閣老交付書左ノ如シ

覺

一在々用水掛引井路の儀川中に井堰を立水を引わけ候處堰仕方により川下の井
水令不足にも不構手前勝手の宜様にのみ仕候故及爭論或兩頬に井口有之場所
片頬の井口付替の時双方不申合一方の自由に任せ仕替候故令出訴候類有之候
自今右體の儀双方致相對普請仕候節は立會無支様に可致候若滯儀有之歟又は
不法の事仕候時は其節より十二ヶ月を限於訴之は可有裁斷右期月過令出訴候
は、不取上候事

一郡境村境山野の論又は質田地等の儀其外奉行所へ訴出候事に付證據無之非分
之儀をも何角申紛し又證據有之儀も年經候へは其事を申掠及出訴相手村方の
難儀に及び其上双方村々困窮の元に成不屈の條向後如是の筋不可訴出候此類

の事訴出僉議の上巧の譯相知候におゐては其咎可申付候事
以上

右の通六年以前辰閏四月相觸候へ共いまだ不行届所も有之様相聞候付猶又此度
相觸候間被存其旨御料は御代官私領は地頭より村々名主百姓共へ右の趣相心得
候様に可被申付候 以上

酉正月

廿七日使者及陸使等へ客屋ニ於テ料理ヲ賜ルニツキ膳夫并客屋へ訓示左ノ如シ
諸所より御使者并御陸使等有之候節御膳夫衆被差出候儀向後は下宿にて落着の
料理尤滯留間の賄共に御表方の者被差出御膳夫衆ことは不被差出候然共於下宿
もかきと御料理被遣と申時は御膳夫可被差出候事

但御料理被遣と申儀候は、到其節下よりも申出候は、其沙汰可被仰付候事
一御使者御陸使等御客屋滯留被仰付候節も朝夕の賄には御表方被差出御料理被
遣候節は御膳夫衆可被差出候事

享保十四酉正月廿七日

廿八日本多兵庫初入部ニツキ三州舉母へ氏家彌之助ヲ使トシ太刀馬代黄金拾兩二
種千匹遣ラル

同日世子大膳君邸付屬ノ輩へ老臣訓令左ノ如シ

覺

一御部屋御附の面々執も無親疎致一和作法能可被相勤候事
附雜談され狂ひ等禁止の事

一御幼年の内猶以於 御前は萬端の作法肝要候御平生廉直正路の儀のみ被聞召
馴候様に可被相心得候縦應御機嫌候とも邪なる儀無之様に可被相慎候事

一不依何事其役の外脇より遮て達 御聞候儀聊不可有之候若品を躑たる衆於有
之は可爲曲事

一御前へ罷出候役々の外不可有推參候惣て御目見等被仰付候儀も御格式無相違
様可被相心得候事

一外向被成御出候節御備行列等は不遠申其外假初の御歩行の時にては御供の面々夫々の身體相應の可有心得候事

一前髪有之小姓衆と前髪無之衆參會可爲停止被差免候續の外同席有間敷候無據儀於有之は番頭衆へ達之可被任差圖候事

一諸所の御番所無闕如可被相勤就中不寝御番の儀は猶以大切の事候條其守不可有油斷候事

一御幼年の内小姓衆の儀別て晝夜共に御次無闕如様に被申談可被相詰候左候て御遊の時は何分の儀無違背被仰付次第可被遂其節候御道中御旅館は猶更心得肝要の事

附晝夜共に節々夜着部屋被罷越候儀無用且又右於休息所小頭にては諸其外音曲等勿論總て高嘶可爲停止候此段番頭衆申談可被付氣候自然於無沙汰は番頭中可爲越度事

一御部屋の儀は御無人の事候條面々上役下役を不謂被遂其節御間合候様に可被

相心得候事

右の通被仰出候條堅可被相守候何邊志道太郎左衛門可被任差圖者也

享保十四己酉年正月廿八日

- 桂 主殿
- 毛 伊勢
- 毛 宇右衛門
- 毛 伊豆
- 毛 筑後

日不詳吾三十間邸ニ大番其外在勤セシムルニツキ矢倉頭人及大番頭へ訓示左ノ如シ

覺

一三十間堀御屋鋪に大番衆其外被差置候條御門番の御中間兩人宛可被申付候事

一御門の儀朝晩共に六時を限日の中の儀は大番筆頭衆切手にて勘過可被申付候
尤又家來の儀は主人々々の可爲切手事

附夜中は御門出入停止に被仰付候雖然萬一不叶子細御上屋敷御中屋敷罷出
候節は大番筆頭衆書出に御目付衆裏書印形にて勘過可被申付候御目付衆不
居合時は筆頭衆書出計にても通用仕翌日其趣御目付所へ相届候様に可被申
付候事

附又家來の儀は主人々々の書出に御目付衆又は筆頭衆の裏書印形にて勘過
可被申付候事

附自然火の御番御奉の節御役場方角又は上御屋敷御中屋敷近所出火の時は
大番衆其外も早速馳付申儀候間左様の節は御門切手の不逮沙汰候事

附麻布御屋敷近所其外遠方にてても大火の節は右の面々早速上屋敷に罷出儀
〇〇〇〇〇〇

一諸事の雜物〇〇〇〇〇〇儀切手詰に被仰付候〇〇〇〇〇〇公物差出候時は其物

色〇〇〇〇〇〇役人切手たるへき事

一他所より御屋鋪内へ來候者の儀町人以下至迄御門に待せ置參先へ申通し壹人
差〇御門内へ入可申候罷歸節〇同前にて尤何ぞ持出候は主人の切手にて勘
過可申付候事

一諸事の商賣人御門出入の儀は上御屋敷御中屋敷麻布御屋敷定札被差〇〇〇者
の分は其〇〇〇〇〇〇不苦候事

右三十間堀御屋敷の〇〇〇〇詰りの儀如是候此外〇〇〇御屋敷の御門同前御法
〇〇左候而御門の都合上御屋敷御中間頭へ被仰付候間自然相〇〇〇の儀於有之は
番の者は不逮申依品右の頭も可爲越度候事

享保十四酉正月

桂 主 殿御印列

毛 伊 豆同

覺

一三十間堀御屋舖に被爲置候。大番衆御上屋敷への御。加番御使者等の節御。御門往來の。沙汰にて。

附三十間堀御屋敷。儀は大番衆筆頭之可爲切手事

附大番衆御番交代の節可相成程は一同に往來。被仕道筋をも兼て相。可被置候事

附當番の内下人御門切手の儀は主人々々より差出其切手に三十間堀に差返候と成とも又は往來。書付尤も何にても持。時は其物色を書付。突可被差出候事

一非番の節加番并御使者尤當番にても支度下り延引暮に及三十間堀へ被引取候節は御門物頭衆へ何某罷歸候通御目付衆より申達御三屋敷の御門可被罷出候尤於三十間堀詰りのため御目付衆よりの手紙取歸筆頭の衆へ可被差出候左候て翌日右手前の奥に何時三十間堀罷歸候通筆頭衆返判を居御目付所へ可被差出候事

一夜中の灯四時を限候儀勿論候自然病人其外無據子細於有之は御目付衆可被相届候御目附衆不居合時は筆頭衆了簡を以被差免翌日其趣御目付所へ可被申出候事

一夜切手の儀大體御上屋敷御門同前にて候主人々々も相叶儀有之御上屋敷御中屋敷罷出候節は筆頭衆書出に御目付衆裏書印形を取可被差出候御目付衆不居合時は筆頭衆承届切手差出翌日其段御目付所へ書付し筆頭衆より可被差出候事

附下人の儀は主人々々の書出に御目付衆又は筆頭衆の裏書印形たるへき事附自然火の御番御奉の時御役場方角出火の節は大番衆其外早速駈付被申儀候間晝夜共に御門切手の沙汰に下達候事

附上御屋敷御中屋敷近所出火の節も右同前の事附麻布御屋敷近所其外遠方たりとも大火の節は右の面々早速御上屋敷被罷出候候間是又右同前の事

一御上屋敷に風呂御焼せ被成候儀候條三十間堀御屋敷近所たりとも町風呂へ入
被申候儀一切停止の事

右三十間堀御屋敷に被爲置候大番衆其外御門旁の締り右の通被仰付候此外大體
の御法諸事御上屋敷同前の儀候條可被得其意候事

西正月

二月朔日公東觀發加判毛利伊豆當役桂主殿手回頭

同日矢島作右衛門所帶方ヲ免シ松本作左衛門ニ後任ヲ命ス

五日再興弓場始德川實紀

十四日長崎より東上の象に關し長崎奉行渡邊出雲守より交付書付左の如し

象從長崎當三四月の頃迄に參候付小倉より中國へ船渡しにて候事勿論其御心得
可有之候道中急度け間敷警固等無用に候得共騒敷道中無之様に御心得可有之候
尤物靜有之様にと存候象給物竹の葉青草わら香水は清く水好之候尤從長崎其刻
に申通も可有之候へ共爲御心得申達候中國へ渡り大阪へ陸地參候事に大造に無

之様御心得可有之候以上

西二月

渡邊出雲守

十五日周布彦右衛門ニ表番頭ヲ二宮源右衛門ニ使番ヲ命ス澁谷九右衛門大組物頭
ヲ免ス

二十日馬場先夫人銀子方柏村市右衛門旅役方深野彌左衛門豊島五郎左衛門勤務中
惡計アリ永ク流刑ニ處セラル

三月三日行相府日記公著府七日上使十二日登營

五日吉川左京大膳君へ謁見ノ爲メ出萩十五日大膳君吉川邸ニ至ル左京廿一日歸邑
六日江戸邸内齋鳥糞ニ關シ大目付回狀左ノ如シ

屋舖の内に齋鳥糞の巢有之候は見當次第早速爲取可申候向後共右の通可被相心
得候

右之趣向々へ可被達候

三月

十五日井原市正歸國ヲ命シ謁見召下羽織下付本年秋留守居トシテ出府ノ命アリ
十六日淺草藏火防ノ番命セラレ

廿二日大組物頭木梨右衛門八麻布郎在勤中所管ノ足輕勤務勵精ニヨリ褒賞トシテ
六拾三人へ鳥目貳貫文下付右衛門八へ褒詞アリ

同日毛利甲斐守匡廣日光社參ノ爲メ出發廿八日歸府

廿三日長崎ヨリ東上ノ象縦覽禁止訓示左ノ如シ

今度長崎より御用の象壹疋江戸へ被差送候見物人狼に有之候ては象驚候由長崎
より申來候付御國中通路ノ節萩其外より見物に罷越候儀被差留候事

享保十四西三月廿三日

廿五日世子萩地ヲ發シ參府陪從毛利伊勢當役手回頭兼務志道太郎左衛門出頭乃美
藏人與番頭市川與三岡部忠右衛門直目付粟屋與一右衛門目付兒玉傳右衛門三家ヨ
リ付屬供從アリ

廿七日長崎より東上ノ象國中通行公儀人提出書左ノ如シ

今度長崎より被牽登候象一疋三月廿七日長門守領内長州赤間關着仕四月四日松
平安藝守様御領へ引渡申候由國元より申越候

但長門守領内泊敷七泊り赤間關より藝州境迄三拾五里餘にて御座候

松平長門守内

井原 藤兵衛

五月朔日

四月三日吾藩大阪負債年賦協議完結ニヨリ町奉行松平日向守越後縮五端雲丹壹壺
家老用人へ晒貳匹宛用達鴻池善八外八人ニ晒三匹或ハ貳匹三木權太夫大黒屋太郎
右衛門へ銀三拾枚宛大塚屋源右衛門へ銀拾五枚下付裏判渡邊小三郎銀三拾枚生田
伊右衛門銀貳拾枚志道藤藏銀七枚雜賀十右衛門銀拾枚幸原藤右衛門銀三枚下附別
ニ鴻池善八へ脇差一腰具三原磨の上無銘鴻池善右衛門杖付吳服一鴻池善左衛門上下
一具下付

九日毛利甲斐守匡廣江戸發廿八日歸邑

十六日新橋中屋舖大膳君竣工開門初ニツキ公巡視セラル

十八日大津郡瀬戸崎失火五百十三戸燒亡

廿一日修驗者改行ヲ誅ス世ニイフ所天一坊ナリ

野史曰四月廿一日捕天一坊梟首部索逮繫其黨修驗南嶽等三十三人盡處刑

廿四日新橋中屋舖竣成ニツキ屋堅地鎮祭ヲ行フ營作ニ關シ盡力ノモノ下附金各差

アリ

五月朔日大膳君着府櫻田新橋邸ニ入ル

同日大膳君居邸ニ揭示訓令左ノ如シ

條々

一天下御制法の旨並御當家御法度相違有間敷段勿論の事候且又在江戸の御法象
て被仰渡候趣可被存其旨事

一御奥詰の衆心得の儀、神文旨候尤番所役所無闕如尤被定置候交替の刻限不

速遲滯諸事行規作法能可被相勤事

附諸傍輩へ對し何ぞ難差置儀出來候共於殿中は可有堪忍段勿論の事

一殿中火用心猶以可被入念事

以上

酉五月朔日

桂主殿

毛伊豆

七日ヨリ八日ニ至ル嚴有院殿五十回忌氷上山ニ於テ法會アリ

八日嚴有院殿五十回忌東叡山ニ於テ法會アリ銀五枚納付公淺草藏火防番アルヲ以

テ將軍ノ豫參ヲ辭セラル

十一日赤間關發火百八十六戸燒失

廿日笹川源右衛門ニ周布彦右衛門代表番頭ヲ志道太郎左衛門ニ榎本九郎兵衛代大

組物頭ヲ島尾五郎右衛門ニ竹中六郎右衛門代大組物頭ヲ命ス

廿七日廣南ヨリ出タル象ヲ大廣間ニ召シテ之ヲ見ル先是ヲ京都ニ召シテ天覽アリ

徳川
史十

六月四日竹姫ヲ松平大隅守繼豊ニ再醮セシム徳川史紀

十三日夜萩藏元吳服方ヨリ發火御長屋北方類焼

十五日山王社祭ノトキ公ヨリ長柄二十五本馬一疋出サル大膳君出府ニツキ本年ヨ

リ馬二疋出サル

十八日町諸職人賃銀定ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

町大工	町木挽
同槍皮	同左冠
同疊刺	同桶屋
同鍛冶	同石切
瓦葺	茅葺
日用夫	

一町諸職人賃銀四分より一匁一分取迄夫々の賃銀御定被仰付候事

一辨當にて諸細工に參候時分は賃銀の外に賄代七分宛に御定被仰付候事

一諸日用賃銀一人に付六分五厘に御定被仰付候事

但賄無しにして

右諸職人此度賃銀改被仰付銘々提札に夫々の賃銀外に賄代をも書付御木屋より

人別相渡置日用夫へは提札不被遣候間職人日用遣申候は、當六月廿一日よりは

右の提札に御定賃銀有之辻相渡候様に尤細工先へは御木屋よりも方々見分の人

柄差出其上打廻りの者時々差廻事候間御定賃銀賄代ノ外堅不相渡候様に尤提札

持參不仕か其外札無之の者をは一切遣し不申候様にとの事

一諸職人細工先へ提札持參不仕細工仕候か又は提札無之諸細工仕候者も自然有

之候は、一廉可被仰付との事

右の通萩市中當島濱崎宰判居候諸職人へ提札相渡候間此段組支配中へも被相觸

候様にとの御事

享保十四酉六月十八日

廿三日前田長左衛門十三日夜藏元吳服方ヨリ發火ノトキ宿番ニアタリ消防ノ術ヲモ爲サス大火ニ至ル迄臥ニツキ公物勘文等焼失セシハ全ク緩怠ノ行爲ニヨリ持掛ノ内二人扶持米二石減少隠居ヲ命シ殘二人扶持ニ米二石ヲ嫡子へ給與三十人通ニ加フ

廿五日林仁左衛門林平八本末ノ葛藤ヲ生シ糾問ノ結果兩人ニ隠居ヲ命シ家祿減少關係人林木工家祿減少林八左衛門隠居林小善右衛門父權右衛門逼塞渡邊新右衛門隠居檜崎彈右衛門逼塞藏田孫助二宮太郎左衛門遠慮證人桑原與兵衛免職ス是爭論審問享保九年ニ起リ本年ニ至リテ裁決ヲ告ク

廿六日物頭井上源三郎ニ赤川半兵衛代三田尻頭人ヲ山縣武兵衛ニ井上源三郎代大組物頭ヲ命ス

同日大膳君初テ出府ニ付赦罪行ハレ牢舍遠島ノ内四十三人ニ出牢歸島ヲ命シ十八人ニ國內出入ヲ免ス

七月三日江戸定居并番手御手大工諸細工人雨羽織合羽襟裝束ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

江戸定居其外御番手の御手大工諸細工人等雨羽織合羽に羅紗天鵝絨段子ノ襟裝束付け候儀は不相成事右の外加賀絹郡内以下の襟等掛候儀は勝手次第不苦候事

四日毛利主水師就長府出發八月五日著府

廿八日將軍鷹捉ノ雲雀三十羽ヲ賜フ

廿九日如雲良幼秀就公子百年忌泉岳寺ニ於テ法會修セラル米十俵銀五枚納付

八月朔日熊谷帶刀ニ福間貞右衛門代大組頭ヲ粟屋新左衛門ニ林平八代粟屋右近組番頭ヲ命ス

二日公及大膳君閣老水野和泉守邸ニ至リ和泉守指示アリ土井新右衛門ヲ以テ大膳君謁見ノ願書提出セラル

十五日公及大膳君召ニ因リ登營吉宗將軍及家重大納言ニ謁ス時十五此時毛利外記桂主殿謁見獻物如例

十八日大坂町人鴻池善八ニ享保五年用達命セラレ同六年ヨリ米三百俵下附本年増石二百俵前額ニ併セ米五百俵下附又善八一家鴻池善右衛門ニ今回米三百俵下附手代理兵衛ニ十人扶持下附臨時急要金ニ應スルヲ以テナリ
廿二日公儀人於江戸留守居ノ輩商議ノ爲茶屋集會許サル
日不詳早魁ノ爲メ藏入給領共凶作ニツキ檢見ニ關シ訓令左ノ如シ

覺

當春以來の早魁御藏入給領共餘分不作損亡有之様に相聞候前々給領及損亡持掛り知行小物成共に押合貳つ五歩に相申間敷と相見候分は檢見の御斷申出尤貳つ五歩に合不申分は御足し石被遣來候事に候當秋の儀不作損亡有之由に付檢見御斷被申出候境の儀は大概頃日より相見可申候條勝手次第早中田見取より檢見の儀可被申出候其儀只今難決候は、先早中田見取の儀御代官所へ被相頼御藏入同然の見取を請させ追て檢見の儀可被申出候暇刈溝刈の外早田の内少々刈上げ相成候分有之候は、見取帳御代官所へ差出一同の見取の内へ入候様に可被申付候

右の趣被得其意面々知行所地下役人共へ堅可被申付候事

享保十四酉八月

覺

一味噌壹貫に付

代八分

一醬油壹升に付

代三分五厘

一糍壹枚に付

代四分貳厘五毛

但貳升よりもみ糍にして壹升貳合七勺五才

一豆腐壹挺に付

代四文宛

但貳寸五分六方にして

九月二日内藤與三右衛門ニ口羽六兵衛組ヲ宍戸求馬ニ内藤與三右衛門組ヲ管セシム口羽六兵衛ニ召下羽織下附

九日江戸留守居井原市正着府閤九月五日黒印令條ヲ授ク

十日用達三谷三九郎へ文臺一硯一面下附

十三日公歸國暇ヲ賜フ關札打坪井彌左衛門江戸發

十九日毛利甲斐守匡廣長府ニ卒ス五十五法名端泉寺嫡子主水江戸ヲ發シ小田原ニ

至リ訃報ヲ聞キ江戸ニ歸ル廿日ヨリ廿六日ニ至ル鳴物停止

廿二日井上半右衛門ニ麻布邸在勤ヲ命ス

廿三日公歸國途次入京一泊伺書認可アリ

廿八日尾越五郎兵衛ニ有馬左兵衛夫人裏老ヲ命ス

日不詳事姫女吉元公 俵山入湯ニツキ訓示左ノ如シ

覺

一今度寧姫様爲御入湯俵山被成御越候御供中下々至迄行規作法能萬端相慎別て

女中交の儀候間男女の差別狼の儀無之様に可被相嗜候事

一右被成御越候儀寔御保養御歩行一篇の儀候故諸事御輕く被仰付候條面々格式の外の儀たりとも被遂其節御用不闕様に可被相心得候事

一火用心の儀別て入念可被申付候事

一御供の面々末々至迄喧嘩口論等不仕諸事穩便に心得肝要に候縱當座難差置儀

出來候共御女儀様御供の儀候條其場合堪忍追て御歸萩の上其旨越於被申出は理非明白に沙汰可被仰付候此段下々へも堅可被申付候事

一在郷諸事不自由其上混納の時節地下繁多の事候條御逗留中尤御往來共に百姓痛に不相成様に相心得聊權柄押買等不致様に下々へも堅可被申付候事

附於俵山雜用買得仕候節地下の者へ無體の儀無之尤買掛り等不致様末又者

共に堅可被申付候萬一右の趣狼の儀有之由相聞候にをいては其者の儀は

不速申主人も品によつて急度迷惑可被仰付候尤御往來御道筋にをいては

同然に可被相心得候事

右之通被仰付候條下々迄堅可被申付候若此旨相背不心得於有之は御歸萩之上
急度可被逮御沙汰候以上

西九月

閏九月三日毛利但馬守山口湯田湯治十七日歸邑

六日公江戸發駕野州日光山ニ參謁十二日品川驛泊東海道ヲ經テ歸國ノ途ニ即ク

日光供從ハ手回備ノミ其他陪從員ハ品川ニ於テ待迎セリ

十六日九月十四日徳山領大風洪水ニテ田畑被害ノ景況左ノ如シ

一高九千四百石餘

内

七千五百石

田方

千九百石餘

畠方

一潰家五拾貳軒

一往還道損九百間餘

一倒木三千四百三拾五本

但往還並松共

一船八艘

破損

一溺死

男一人

廿八日竹姫君松平大隅守へ入興ニツキ金入五卷獻上ノ奉書ヲ賜フ

日不詳小次郎徳川右衛門督ト改稱ニツキ訓示左ノ如シ吉宗將軍次男

小次郎様今度御元服三位中將徳川右衛門督様に被爲成候依之御家來中右衛門と

申名は勿論右衛門八右衛門七右衛門兵衛等の名相改候様にとの御事

酉閏九月

日不詳手廻頭世子邸頭人兼務志道太郎左衛門へ訓令左ノ如シ

一御部屋の儀は御手輕被_〇_〇其方並板本彈正佐世大學三人順番にして諸事の

御用兼役にて所勤被仰付候間不依何事一切の儀承届引請可致沙汰候事

一何にても奉存寄候儀有之候は、無遠慮可申上候且又 御幼年様の御事候條御

部屋の儀は御納戸の御用其外御表にて當役御手廻頭不及〇〇程の濃々の儀をも聞届萬端しまり能可致沙汰候事

一御部屋付の面々行規作〇〇〇猥の儀無之様手堅可申付候若不心得の者於有之は 大膳様及御聞御國へ可致言上候萬一當座難差置者有之候は、是又 大膳様へ申上如何體にも申付追て可遂言上候事

以上

酉閏九月

十月五日浦圖書死去香奠銀二枚下附

六日閏九月五日長門國豐浦郡鳴戸發火家數百拾貳戸燒失

十五日歸城

是時將軍ヨリ銀三枚宛縮緬壹卷宛大納言ヨリ紗綾一卷宛寧姫綾姫へ公ヨリ裳分トシテ進セラル

同日歸城禮使トシテ兒玉縫殿ヲ出府セシム召下吳服一下附

廿六日去月十九日毛利甲斐守匡廣卒ス於是今日主水師就四十二家督ヲ命セラル先是主水弟竹之助ニ新田一萬石分附センコトヲ乞願セラル是日マタ許命アリ因テ竹之助後國苗ニ清末一萬石ヲ分テ與フ時ニ竹之助十四

廿八日借金質物ノ利息ニ關シ閣老交付書付及老臣添書左ノ如シ

元祿年中金銀吹替以來米穀高直候處近年下直に相成候然所借金銀並質物利金は前々の通にて諸人致難儀候由相聞候依之元祿十五年午の年以來の借金銀は向後利金五分以下たるへし今暮前々の借金銀を追越手形を致直し借用候も是又利金同前の事

一只今迄元利不相濟候者今度利分減少の不及沙汰候事

一右の趣双方相違無之様急度可相守此上返辨滯候は、借し元より奉行所へ可相届候若又右定より利金下さるにをいては借り主可訴出候事

一新規の借金銀は尤相對次第たるへし猥に高利にすへからさる事
右の通急度相守者也

酉十月

老臣添書

元祿十五年午の歳以來の借金銀利分之儀に付從公儀前紙の通御書付被差出候付
寫拜見被仰付然は御家來中並町人百姓其外末々に至迄右御書付の趣可相心得旨
候條此段組支配々々へも堅可被申付候以上

十一月

山 縫 殿

毛 伊 勢

毛 宇 右 衛 門

毛 外 記

毛 筑 後

同日聞老戸田山城守死去飛札ヲ以テ弔セラル

十一月朔日諸借金納付延期ニ關シ聞老交付書付左ノ如シ

近年諸人勝手向難儀の由に付借金銀利分等相減候様被仰出候就夫諸拜借今年

分上納の儀御用捨を以被差延候間右ノ分來年より上納可仕旨被仰出候間其趣
可存候

右ノ通可被相觸候

酉十月

六日當役桂主殿廣保辭職ヲ許シ山内縫殿廣通ニ後任ヲ命ヌ主殿へ刀一腰代青江拾次
下附

十一日村上又右衛門用談役ヲ免ヌ津田五左衛門ニ手元役ヲ命ヌ長井二郎兵衛用所
役ヲ免シ田中九郎右衛門ニ後任ヲ命ヌ

十四日當職毛利筑後辭職留任

十八日桂主殿家資窮乏ニ因リ負債銀五拾貫目ノ内三拾貳貫目納替殘拾八貫目本年
末ヨリ六貫宛三年間貸與セララル

廿日幕府儉約令發布及老臣添書左ノ如シ

一前々より被仰出候儉約之趣愈堅可相守候近年八木の價別て下直に付諸人致難

儀候由相聞候付今度元祿十五午年以來の借金銀の儀向後利分五分以下たるへき旨先達て御觸有之候事

一總て近年の風俗に隨ひ衣服或は親類諸傍輩出會等の節料理又は御番の節辨當等至迄不得止事仕來候品有之由に候右體の儀頭支配有之面々は其頭支配より心を付可申事に候家作の儀も火除に成候様に仕無益の儀仕間敷候平生の身柄随分質朴仕何分にも身上取續御奉公候様に相心得候儀第一の事候

附徒若黨衣服布木綿取交可致着用候

一家婆の用意諸道具等分限に應し輕可仕候尤前々被仰出候趣是又堅可相守事右の通萬石以下へ相觸候爲心得萬石以上の面々も可有一覽候以上

酉十一月

老臣添書

一御家來中累年不勝手の儀其上最前段々品定被仰出儀候へは各別の費有之間敷儀候所近年少々妄に相成候廉も有之由相聞候元來質朴を守といたし候儀江戸

表の被仰付並御國法以同前の儀米穀下直旁付て彌増困難の事候へは右品定の内をも猶又令省畧萬端儉約を被用勝手取續覺悟肝要候此度於江戸表も儉約の儀付て別紙の通御書付被差出候付是又拜見被仰付候事

一女中衣類の儀近年品宜成候様相聞候最前被仰出候通彌以相違有間敷候事

一案内不時の振廻候儀親類又は朋友懇意の間にては御法の外取繕候様に無之候ては強て馳走にも不相成様主客相心得なそらへ事を以菜數肴等相増其外取合候て興を催候類の儀有之様に相聞甚以不心得の至候是又御法の内をも可成はとは減少に吟味可有之候事

一組入番入等の振廻停止候處に近年妄に相成且御番所に在いて辨當等を取寄相番中に差出候類の儀有之由相聞候自今彌被差留候事

一嫁娶規式婚禮道具等の儀大概品定有之候ても當時の儀候條右品定にかゝはらす面々分際々々を願猶相當を引下候心得可有之候事

一養子の儀血脈其外由緒を以相定事候へ共若相應の者於無之は無據他家に相求

候儀勿論に候然所近來は面々不勝手故養子縁組ともに内證にて金銀の取遣令
相談輩も有之様相聞候不勝手の者は子共の身上有付も不相成いつとなく罷過
又勝手且々取續候者も子とも有付候へは令困窮の様罷成候請方の者は當分勝
手向潤にも可相成候ても嫁娶等は相互の儀第一諸士風俗の衰甚以不定事候自
今此旨相心得人々身上有付無滞様吟味可有之候事

一新家作の儀一坪以上は繪圖を以申出被差免候上作事被仕事候へ共自今は可相
成程は新作事差置假令無據被申出候とも全事をなぞらへ候儀彌以あるへから
す候事

一御城下人張の儀分際相應有之といへども是又當時の儀候條近方あるきなどの
節は被減候ても不苦候事

一面々召仕候男女の恩給凡其程有之儀候處不相應高直召抱候輩も有之様相聞候
甚以風俗の妨自今可有其吟味候事

右の通可申聞旨被仰付候條面々能々可被相心得候如是被仰出候上若不心得の衆

も有之をいては御目付衆見届の儀は勿論内證にて承候趣たりとも不依大小身時
々可及言上旨候條旁被得其意組支配中へも可被申聞候以上

酉十一月

山 縫 殿

毛 伊 勢

毛 宇 右 衛 門

毛 外 記

毛 筑 後

廿八日防長ノ内本年早損及八月十九日九月十四日風雨洪水被害景况幕府へ報告左
ノ如シ

一高八萬五千三百石餘

内四千五百六拾石餘永荒

一土手井手川除四萬千百三拾間餘

一流家五百六拾七軒

一崩家五百四拾四軒

一高札場九ヶ所

一廻船獵船共破船四拾壹艘

一死人七人

内男四人

一死牛三疋

現高ニ過石ヲ掛候差引左ニ記ス

一現高五萬四百石餘 損 亡

内貳千七百石餘 永 荒

一土手井手川除貳萬四千四百九拾六間

右現高ヲ左ノ通ニ坪割過石ヲ入被仰届候事

一高八萬五千三百石

但長府御配地ヲ引殘三拾貳萬貳千六百石分ノ損亡壹萬石ニ付貳千六百四拾

石餘ニ當ル

内四千五百六拾石餘 永荒

内

三萬四百五拾石 早損ノ分

殘五萬四千八百五拾石 水損ノ分

一井平川除四萬千八百三拾間餘

但水損五萬四千八百五拾石ニ當ル

同日長府領本年早損及八月十九日九月十四日風雨の爲被害景况毛利主水ヨリ報告

左ノ如シ

覺

町數貳百貳拾七町壹畝

一田高五千六百七拾石貳斗四升三合九勺

米千七百貳石五斗七升貳合五勺六才

右植付ノ節早魃ニ付不作捨リノ分

町數五百三町三反九畝
一田高壹萬貳千五百八拾四石七斗三升六合八勺貳才

米貳千六百貳拾七石五斗三升八勺四才

一町數七百三拾町四反

合高壹萬八千貳百五拾四石九斗七升八合七勺貳才

米四千三百三拾石壹斗三合四才

右日損并八月十九日九月十四日兩度大風雨ニ付檢見捨リノ分

一倒木八百四拾貳本

一倒家三百拾六軒

但居家牛屋高屋長屋トモニ

一高札場壹ヶ所

一小祠壹宇

一怪我人男一人

一女死人壹人

日不詳出火ノトキ供番ノ輩ニ關シ訓示左ノ如シ

一出火の節火元へ被罷出候衆の儀は只今の通可被相心得儀勿論候御供衆の儀堀

内の出火は不及中堀外にても近火に候は早速御城可被罷出候事

一惣門の外隔候出火たりとも火の手煙の様子を見合可及大火趣に候か又は風並

惡敷候は、是又早速御城可被罷出候小火にて風も穩に候は、不及被罷出候事

右出火の節御供番の面々近年は火の大小風並等も不依早速御城被罷出候へ共左

候ては費の儀も有之付て此度右の通被仰出候間可有其心得候 以上

酉十一月

十二月朔日通用貸借證文質物利相ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

一壹步三朱

但通用貸借りの利足

一壹步五朱

但質物利足

付證文質物の儀は壹歩三朱の事

右今日より新規に致借用候分利足前書の通被仰付候事

一只今迄請返不相濟質物の分は先壹歩八朱の利足を加請返可申候左候は、右質

札の裏に表書の利足請取の段相調させ質屋印形取置追て利下相極候上差引取

遣之事

右市中在々へ右の通被仰付候條此段組支配中へも可被申觸候事

酉十二月朔日

同日加詰利月分訓示左ノ如シ

覺

一加詰利の事

但六月迄に借り請候分は加詰利を以可致納方七月より以後借用の分は月別利を以納方の事

付質物借の儀は借用の月より六ヶ月迄に請返候分は月別利七ヶ月へ掛り候て

請返候は、加詰利を以請返の事

右加詰利の儀は月數に不構壹ヶ年の利分の儀候然も借銀借り請の儀は年分追々入用次第かり請又返濟の儀も約束の物切より内にも關方仕儀に候へは前書の通月分け被仰付候事

享保十四酉極月朔日

六日宿次ノ奉書ヲ以テ鷹捉ノ鶴ヲ賜フ十八日萩ニ到ル

十日毛利竹之助へ分地村分人分ニ關シ毛利主水ヨリ萩へ申報ノ如ク雙方ノ役員派

出授受終了竹之助へ内藤左兵衛長沼左中平野十郎渡邊酒造へ付セラル吉元公配

十一日森惟元大膳君死去ニツキ大膳君半減十日ノ忌寧姫大膳君本式ノ忌受ケラル

十二日金銀出入ニ關シ大目附廻狀左ノ如シ

金銀出入の儀奉行所にをいて不取上段去る亥年相觸候ても近來金銀通用相滯候由相聞候付當酉正月よりの借金銀買掛等出入の儀如前々取上裁許可仕候旨三奉

行へ被仰出候間被得其意より々々可被相達候

十二月

十三日十一月二十八日豊浦郡安岡浦發火家數百九戸焼亡之ヲ幕府ニ報ス

十五日毛利竹之助白金邸ニ移居

十六日毛利主水師就從五位ニ叙シ主水正ニ任ス

二十一日修補銀組内修補銀増借如詰五朱納付及祠堂銀添狀借等ニ關シ訓示左ノ如

シ

覺

一 修補銀の事

但公銀を以て諸所に被立置候分

一 組内修補銀の事

一 増借の事

右の三廉當暮加詰五朱利相調元の儀は當暮の調被差延候事

一 祠堂銀の事

但當暮は加詰五朱の利銀調被仰付春に至何分沙汰可被仰付候事

一 添狀借銀の事

但當酉の暮月別壹歩半の利押被仰付置候内加詰五朱利銀主へ被渡遺殘分の

利延借り主手取に被仰付候事

附元銀調方の儀は到春可被仰出候事

右の通常暮沙汰被仰付候事

酉十二月二十一日

二十二日大組番頭完道二郎左衛門本年兩度ノ城番關如ナク勤務ニ因リ米八俵下附

二十三日公儀人井上八郎右衛門死去

二十四日大膳君松平兵部大輔宗矩妹勝姫中務大輔昌女ヲ娶ル可ノ許命アリ

同日神谷勘解由江戸ニ於テ心亂内藤作右衛門ヲ殺害シ勘解由親族預附中死去ニツ

キ家名斷絶嫡子正左衛門息千代松阿曾沼六左衛門子分ニ爲シ阿曾沼政之允聲養子

ノ請願許可アリ

廿七日山縣平之允目附へ直訴ノ趣ニツキ親族へ預付審問ノ結果隠居ヲ命シ遠近付
ニ加フ證人兒玉勘右衛門親族糸賀八郎右衛門通塞ヲ命ス
廿八日新規借用銀利足ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

一壹歩

但通用銀貸借の利足

一壹歩三朱

但質物利足

附證文質物の儀は壹歩の事

右新規借用銀利足當月朔日より右の通被相定候尤前廉通用利壹歩三朱質物利壹
歩五朱證文質壹歩三朱と被仰付候へ共此度御僉議の上當極月朔日よりは新借の
沙汰被相極候故前書の通仰被付候事

酉十二月廿八日

日不詳八組頭中及諸臣家計維持訓示之ニ關スル廉書及八組中ニ對シ訓示左ノ如シ

諸臣へ對スル覺書ハ八組頭中ニ訓示ト同一ナルヲ以テ略

八組頭中へ可申聞覺

八組中勝手向別て差詰候由にて舊冬以來歎被申出度々御貸米銀等被仰付置候所
猶々各別の御吟味被仰付被下候様にと被相願候御所帶地道の御不足有之上近年
御米紙段々下直に相成年々の御不足彌相積り其上當年無據臨時の御入用も有之
且御國中旱損風損にて檢見落米莫大の儀彼是差湊御國大坂共に御繰卷差問何分
御吟味の品無之候ては御取續難相成御家來中も困窮の段旁及御聞候處只今各別
の御吟味被仰付候ては下以不相調儀此段別て御苦勞に被思召御國御用心銀は不
及申江戸御用心銀をも可被差出候間且々も御越年の御手當并御家來中取續の吟
味をも猶又可仕旨重疊御意に付て御貸米銀添狀借等今暮の調來春へ持越に被仰
付多借の面々も押石の内餘分手取仕候様被仰付委細別紙の通候段々御惠を以右

の通被仰付儀候此上一向御救の被絶御吟味候條於各も此趣被致勘辨右手取石を以て來秋迄の儀如何様も取續の覺悟仕候様能々可被申聞候

覺

一臨時兩度御貸米の事

一御當用御借請御救米方米銀取合添狀を以貸渡被仰付候米銀の事

一御當用御借請御救米方米銀取合手取明石へ對し御貸渡銀の事

一町添狀借の事

右四廉元利納方春へ持越に被仰付候利たけ被押置元銀當り候押石手取に被

仰付候事

一四石引米の事

但當暮の納方被差延春へ持越被仰付候事

一内借の儀は添狀借の大格を請いか様共下の作廻に可仕候事

右前書の通に被仰付候條支配々々へ可被申渡候事

享保十四酉極月

八組中勝手取續の儀依其品八組中へ押渡候儀は各相談の上一同に被申儀も可有之候へ共只今迄の通平等に不勝手の款被申出候ては數多の御人數御救の御手届不申儀御所帶も至極御差問の時節一向難及御吟味候自今可相成程は一組切に被致吟味一組の内至極困難仕當分より取續難相成尤御扶持方の願申出候儀も不相成譯有之差問候衆於有之は勝手向の趣能々被致僉議候上其名を顯し銘々の頭々より可被相款候然上は勝手向の儀に付各寄合被申談候儀も無據儀の外は繁々に無之様可被相心得候

以上

月日不詳吉元公記

御國中坐頭替女是迄他國へも爲執行出行致來候處被差留米被下候石につき六合六夕宛諸都より彌延郡配當の内を以て壹人扶持被下候

住吉踊車前後馬上遠慮ノ事出ル
萩中鳥打始ル
旅役出来計

毛利十一代史卷之五十七

大田報助編次

泰桓公記十七

享保十五年庚戌正月朔日公國ニ在リ

九日寧子吉元發熱十二日疱疹ニ定リ廿二日酒湯ヲ引ク

十六日乾字金通用ニ關シ閣老交付書付左ノ如シ

覺

一 乾字金之儀去る寅年限通用相止其以後者潰金之積を以金座え買取候へ共今以
殘候員數も多候依之向後は潰金に不仕其儘通用可仕旨但新金并慶長金壹兩之
代に乾字金貳兩可相用尤乾字金壹兩は新金慶長金貳分之積りたるべき事
一 御年貢諸運上を初 公儀え納候類并合力或奉公人給金且又諸商賣物代金等共
外金子に而取やり候儀右之積を以通用可仕候事

右之通可相心得者也

戊正月

廿八日岩崎理右衛門數年熊毛那代官役勤務管下之風俗ヲ改良シ蟲枯檢見落米等ニ關シ公益ヲ供ヘタルニ因リ金拾兩下付

二月四日當職毛利筑後辭職ヲ許シ堅田安房ニ後任ヲ命ス筑後ニ刀一腰末保生五枚代金拾三枚下付

六日山縣市左衛門手元役ヲ免シ藏元役飯田六郎兵衛ニ後任ヲ命ス

七日奴婢給金ニ關シ大目付回狀左ノ如シ

近年米下直に候處諸奉公人給金は前之通無替儀高直に候間給金引下げ候様舊冬町觸有之候奉公人召抱候は、右之趣相心得候様向々へ可被相達候以上

戊二月

同日毛利但馬守徳山ヲ發シ三月二日著府

十一日玉井庄左衛門城番其他勤務精勵ニ因リ隠居ヲ許シ時服下付

同日渡邊小三郎裏判役ヲ免シ口羽衛士ニ後任ヲ惟川治右衛門ニ和智二郎兵衛代寺社奉行ヲ命ス

十二日京都頭人平川長左衛門ニ飯田六郎兵衛代藏元兩人役ヲ命ス

同日奴婢人宿ノ制大目付回狀左ノ如シ

覺

一近年諸奉公人取逃脱落多畢竟請人共不埒之仕方に付今度吟味之上人宿貳百貳人に相定組合申付給金之儀も引下げ候積り町奉行所に而申付候事

一右之通に付奉公人請狀之節判元見に參候者え人宿共方に而馳走かましき儀一切不致并奉公人引越之砌部屋入之振廻等堅相止候様人宿共へ申付候間此段部屋頭共へも主人へ可被申付候事

一人宿之儀町々に組合有之候間其所に而可被聞合候事

戊二月

十三日大照院寺内實際寺ヲ道樹院ト政メ兩院並ト爲ス

十六日市川三右衛門町奉行ヲ免シ三田尻頭人井上源三郎ニ後任ヲ飯田與一右衛門ニ三田尻頭人ヲ命ヌ中村孫右衛門大坂頭人ヲ免ヌ周田八郎右衛門ニ世帶方ヲ長嶺新五左衛門ニ生田權右衛門代吉田代官ヲ命ヌ石川彌右衛門町奉行ヲ免シ松本作左衛門ニ後任ヲ命ヌ

廿四日萩藏元窃盜事件起ル

廿七日去ル十八日長府領豐浦郡室津浦發火漁家百十壹戶民家貳拾貳戶寺壹宇燒失

長府ヨリ報告アリ

廿八日毛利筑後廣政嫡子豐三郎毛利宇右衛門廣規嫡子權之助ニ公初テ賜テ賜テ豐

三郎ヨリ太刀小馬代脇差一腰原清則權之助ヨリ太刀小馬代小脇差一腰大寸九分餘代付ヲ献ス

同日祖式右衛門八組御弓ノ者深川三十三間堂ニ於テ帳前通矢人名奉納通矢報告案

祖式左中右衛門八右衛門へ令詞左ノ如シ

帳前通矢人名左ノ如シ

貳拾四本目ニ通矢

勝屋武左衛門

拾七本目ニ通矢

飯田七郎右衛門

三拾四本目ニ通矢

伊達市之允

三本目ニ通矢

伊達市兵衛

貳本目ニ通矢

脇藤兵衛

貳拾四本目通矢

高橋勘左衛門

八本目通矢

波多野新之允

七拾三本目通矢

三戸七郎左衛門

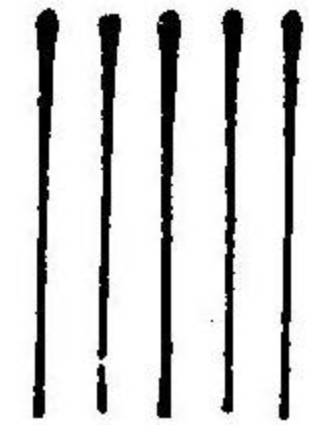
長州

粟屋彈藏正房指南

祖式右衛門八兼正祖

弓之者

奉納通矢



矢檢見

享保十四己酉

何ノ何某在判

八月八日

同同同

式左中

右被成 御意候其方組之者共之内八人去秋於江戸帳前仕候段委細被開召上候
兼而惣古等ノ儀無緩申付候故ト被思召候此段可申聞旨候事
日不詳借米利分五朱以下ノ利足ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

一元祿十五午之年より享保十四酉十一月迄之借米は向後以利分加詰五朱以下之
利足を加可致取遣假新借に手形を致直し候とも利分同前之事
一享保十四酉極月より借用米の儀は利足壹割貳歩以下を以可致取遣候事
右前書の外高利無之様に市中在々に至迄堅可被申渡候以上

戊二月

月日不詳御在國中諸番所判算用ニ關シ手廻組八組寺社組證人所步行所へ訓示左ノ
如シ

一御在國中諸番所判算用之儀只今迄は御歸城當日より翌年極月晦日迄を物切に
而算用相縮候得共正月より御發駕迄之内不動有之候得は皆所勤上所勤共難申
に付向後は御歸城當日より御發駕迄之算用に被仰付候事
附御在國之中山口其外え被成御越候節御供衆之儀も向後は御目付所え銘々
勤不勤之付出仕御在國中判算用に御加させ被成候事

一御在江戸中之儀是又御著府當日より御發駕迄之判算用被仰付候事
三月四日揚井甚平發狂銃砲ニテ自殺セリ嗣子ナキニヨリ父孫右衛門隠居復之請願
ヲ許シ家祿高百四拾石之内貳拾五石減少殘高百拾五石ヲ孫右衛門ニ給與
十八日幸橋夫人有馬左衛門女子分娩
十九日毛利但馬守神田橋見付番命セララル

廿八日儉政中諸臣課出米ニ關シ黒印令條及老臣添書左ノ如シ

累年勝手不如意タリトイヘトモ家中ノ出米ヲ以成ヘキホトハ尋常ノ入用相違ヘキ事ニアラサル故去辰年ニモ段々僉議セシメ儉約其外ノ吟味ヲトケ馳走ノ出米一先差返ス處ニ元來不足ノ勝手第一近年米紙下直旁自他國ノ借銀莫太ニ速ヒ去冬ニ至テ至極差問急度各別ノ仕組申付ルノ外コレナキニ相決スルトイヘトモ歲末ニ及ヒ下以別而迷惑セシムヘキ儀ニ付江戸國元ノ用心銀ヲ以漸越年ノ料トナス處ニ今ヨリ來年ニ至リ參勤ノ入用且借銀返濟ノ心當ナク彼是以太切ノ時節候然トモ度々重キ馳走ヲ請當時猶困究之家中出米申付ルノ段苦勞此事ニ付彌深ク儉約等ノ沙汰セシムルトイヘトモ過分ノ不足償ナク止事ヲエス先當年出米申付ルノ外コレナク候條其旨ヲ存シ馳走ヲトクルニオキテハ本望タルヘシ委細年寄共ヨリ申聞スヘキ者也

享保十五年三月廿八日

御 黒 印

覺

一多年御勝手御不如意之事候へは御家來中之出米を以可成ほとは尋常之御入用被相違候様には被仰付段勿論之儀に付而去辰年

〔僉議被仰付〕

〔御吟味を以〕

〔差返之處元來不足之御所帶〕〔第一近年打續米紙下直旁大〕

〔御國之御借銀彌増に相成既〕〔去暮至極差問兎角御仕組候〕

〔仰付之外無之段及 御聞候處及〕〔被仰出候ては下にも彌可令迷惑儀に候間江戸御國之御用心銀差出候様にと被仰出漸取合御越年相成候然共當春より〕

〔御取續來年御參勤之御入用〕〔借銀返濟等之以〕

〔御馳走を被請猶又困究〕〔出米等被仰付候段別而御太切之時節〕

〔御馳走を被請猶又困究〕〔出米等被仰付候段別而御苦勞被思召去冬以來重〕

〔吟味被仰付候へ共各別之筋無之付〕〔自今彌深く被用御儉約尤兼而は 御姫様來亥の年御出府被成等候處是以可被遊御延引旨被成 御意其外種々被盡御吟味候へ共過分之御不足償之絶方便不〕

〔得止先當年別紙之通出米被〕

〔條候得其意可被〕

〔御馳走出米之儀は右之通候〕

〔於御儉約は猶又三ヶ年之間〕

〔至極被遊御省略諸事の御格式〕〔被替候候〕

程の儀候條於御家來中内證の儀は大概御扶持方成同可被相心得候若列に引れ難任心有之候は或親類縁者成同列相組又は近所等申談且々勝手取續之覺悟肝要候尤御儉約間は愁訴等の儀一切被差留候事
一病者幼少并不勝手に付當時御扶持方被下置候面々御馳走の儀は別紙之通増候而被召上候事

一百石以下の衆且又寺社家の儀は随分際出米被減候是又別紙に有之候事
一出米被召上候上は諸借銀返濟難相成事に候依之調方の儀別紙之通被仰付候事
右御家來中能々被存此越大小身共可有其心得旨候以上

戊三月廿八日

山 縫 殿

堅 安

毛 伊 勢

毛 宇 右 衛 門

毛 外 記

四月七日水戸宰相宗堯死ス音曲ヲ停止スルコト七日普請ハ三日八日諸大名惣出仕
九日徳山興元寺ニ於テ開基興元寺殿興元家大居士杉次郎左衛門成左衛門名左衛門嫡男覺永元正大居士
杉小成名二百五拾年忌寅正月廿六日午三月六日ニ當リ又例年正五九日祈禱ヲ修シ其他
ノ由緒アルヲ以テ當戌年ヨリ寅年迄五年間貳百部宛千部修行セントノ請願ヲ許シ
料物トシテ銀貳貫五百目寺社所へ交付利潤ニナシ一年六百目宛興元寺へ給與セラ
ルヘキ命アリ

十五日幕府令アリ諸大名參覲交替舊ニ復シ一年タルヘシ毎年課出米ヲ除免セシム
實徳川 紀

廿三日鷹司内府兼房死去養心夫人半減十日ノ忌受ラル公ハ叔父ノ續ナレトモ養心
夫人縁談ニツイテ兄弟分ニテ服忌ナシ

廿六日毛利但馬守本年九月賜暇來年八月參府スヘキノ命アリ

五月六日新藏出火吉元公記

八日松平兵部大輔初入部ニツキ越前福井へ使ヲシテ公ヨリ箱肴二種樽代金千匹大

膳君ヨリ箱肴二種樽代五百匹進セラレ

日不詳菰地ニ於テ菰鳥銃撃ニ關シ遠近方内諭左ノ如シ

萩内に而菰鳥御打せ被成候諸士町方共に屋敷構之内森林等に居候をも打候様

被仰付尤家の棟などに居候成は用捨被仰付候途案内屋敷内江入候而打候儀も

有之又外より打候而留候上途案内候儀も可有之候間留り候は、右足輕の者え

捕せ候様に成共面々より渡候と成共仕候様にとの御事

右之通御内意申候様にとの御事

享保十五戊五月

山 縣 藤 助

三 戸 與 右 衛 門

月日不詳儉政ニツキ一門老中其外ヨリ献上品減少ニ關シ訓示左ノ如シ

御在國中

御献上物減少之覺

一御節酒一徳宛

一千肴一折宛

御 一 門

老 中

御 手 廻 頭

右御儉約間生肴之所右之通千肴差上候様被仰付候事

一千肴一折宛

當 役 之 老 中

一御祈膳物一折宛

一千肴一折宛

江 戸 當 役

御 手 廻 頭

一千肴一折宛儘相

記 録 所 役

奧番頭
御直目附

休息公儀人

御小性中

大御納戸

御奏者

山縣少助

御目附

御側醫師

右八月廿四日 殿様正御誕生日に生看差上來候得共御儉約間右之通干看差

上候様被仰付候事

一千肴一折宛

江戸當役

御手廻頭

一同 一折宛備相

肥録所役

奧番頭

御直目附

御小性中

大御納戸

御奏者

山縣少助

御目付

御側醫師

右九月廿二日御祭に付生看差上來候へ共御儉約間右之通干肴献上仕候様被仰付候事

一知行所物一種

御一門

右知行所御暇に而罷越候節時により滯留之内歸萩之上兩度被差上候儀も有之候得共御儉約間一度献上候様に被仰付候事

六月朔日井原大學ニ兒玉三郎右衛門代城代役ヲ命ス

五日楮幣通用ヲ許ス大目付廻狀左ノ如シ

金銀錢札遺有之所々先年札遣相止候へ共向後は前々札遣仕來候所之者勝手次第可仕候

但札遣致候は、御勘定奉行へ可被達候

右之趣可被相觸候以上

戊六月

十日三戸新右衛門藏元吳服方勤務中公物竊取ニ因リ關係人糺問ノ結果新右衛門礫三上彌兵衛田中八郎左衛門岡五右衛門中村半兵衛藤井市之助遠藤武右衛門斬首五

右衛門嫡子岡六次郎半兵衛嫡子中村彦右衛門市之助嫡子藤井市郎左衛門遠流半兵衛弟中村新八所退天野仁右衛門家祿沒收藏元小檢使加藤與一右衛門賄方三好一兵衛遠流ニ處セラ

十五日加判役毛利伊勢元雅辭職留任

十八日豊浦郡長府町失火民家百餘戸燒亡

同日直目付粟屋與一右衛門辭職留任小倉縮貳反下付

十九日ヨリ廿日ニ至ル清光夫人百回忌清光寺ニ於テ修セラ

ル米拾俵銀拾枚納付同日中島傳兵衛松本ニ於テ竹ヲ竊取シ又嚴禁ノ賭博ヲ爲シタル科ニ依リ流刑ニ處セラ

ル關係人河野六左衛門家祿之内貳拾石減少隱居ヲ命シ殘高六拾壹石六升嫡子孫四郎へ給與仁保太左衛門隱居ヲ命シ嫡子常之助へ田總惣左衛門隱居ヲ命シ嫡子次郎へ相續セシム

廿二日長府領長府中ノ町出火土屋敷四拾戸町家竈敷七拾五戸寺二字小社二字二ノ宮社司同下社人屋敷拾戸土藏四ヶ所燒亡之ヲ幕府ニ報ス

日不詳楮幣通用之期限德川實紀

此月令セラル、ハ前々楮幣ヲ發行シ地廿萬石以上ハ二十五年廿萬石以下ハ十五年ノ間通用セシムベシコノ年間ヲ過テモナラ楮幣行ハントイフ輩ハ其時ニ至リ勘定奉行ニトヒハカルベシトナリ

七月朔日當番ノ扈從中御次詰ニ關シ手回頭ヘ訓示左ノ如シ

覺

一當番之御扈從中御役通を始晝夜御次相詰候段は勿論之儀去辰の年にも其沙汰有之候然處御次御無人かちに相成朝の内などは別而御用も多し不自由之由聞候條申し相詰御用相達候様能し可被申聞候事

一御小性中御番交替之儀時に依於部屋入替候儀も有之様相聞不心得之儀候自今以後前々之通中の口御式臺より致往來人御次之刀掛に銘々刀を掛置番頭へ相對於御番所入替り候様に可被申聞候事

一御小性中折節無據用事に付部屋へ罷越候とも其用事相濟候は、早速御番所罷

出候儀可爲勿論候事

右之趣能々相心得行規作法し諸事古來之格式不混雜様し可被申聞候尤唯今迄勸方一列にも有之間敷候間其善惡被見届委細可被申出候惣而ケ様の儀は番頭衆常々心得肝要之儀候自然可達其沙汰儀緩せも於有之は番頭衆越度勿論の儀候間此段をも可被申聞候以上

戊七月朔日

同日毛利大藏諸願之引米ヲ許サレタルニツキ命令左ノ如シ

毛利大藏

右年來不勝手に付去未の年より五六ヶ年之間引目を且如行所住居之儀願之通被差免候然處今度御仕組に付借銀納方之仕法就被仰付候銀先へ整方談合等も申付能候間當暮より引米被差免被下候は、手取の内を以借銀納方之吟味申付身柄之儀到來年出萩仕度候由御斷之趣相伺候處如願可被遂御許容旨候事

二日旅役方神代又右衛門中村平右衛門旅役銀窃取ニ關シ不届アリ逼塞ヲ命ス

十三日松平伊豆守閣老ニ松平右京大夫閣老並土岐丹波守大阪城代ニ任ヌ飛札ヲ以テ太刀金馬代二種千匹ヲ贈ラル

廿二日遠近付山縣六左衛門冷泉勅右衛門代都濃郡代官ヲ命シ大組ニ加フ
廿六日江戸中塵芥棄捨ノ制大目付回狀左ノ如シ

江戸中塵芥捨所之儀只今迄永代新田に定捨候處右之場所相止向後深川越中島後え塵芥捨場相定候付所々之札建直し候間當七月より右之場所へ遣し可捨之余方え一切不可捨之中途にて捨之又は夜船にて遣候儀仕間敷候若相背者於有之は急度曲事可申付者也

戊七月

廿八日諸國御料へ置糶并買米ニ關シ市中へ發布書付左ノ如シ

町觸の寫

一此度御年貢米を以御料所々置糶六拾萬石被 仰出差置候依之此度より來年へ懸段々御買米有之候事

一右御買米の儀入札は相止候間米賣上度者は上中下の手本米にて國所を書記直段書付相添來る十七日淺草御藏え可致持參候事

但右手本米并書付持參之二三日中御買上の儀可申渡候

一御買米之儀其節の時相場に准候様買上可申付候事
一御買米附送り候船賃其外入用は一品切に金高別紙に書付御買米直段へ仕込候儀仕間敷候事

一御買米水揚人足は御藏より差出し可申候米納之儀は汐時より勝手次第可相廻候早速納可申候萬一日暮候は、其方より番人付置翌日可相納候事

一米納之儀只今迄の通三十六俵併に致しさほくしを入何千俵にても三俵廻しを立平均右高ヲ以可相納候事

一代金渡候儀米納仕廻候は、早速可相渡候事
一大坂にても當秋より段々御買米有之候事

右之通相心得御買米直段と時相場并大名給所の拂米直段格別の相違無之様可仕

候不埒の仕形有之相聞候は、吟味の上急度可申付者也

戊七月

八月二日幕府ヨリ尋人三郎兵衛ニ關シ大目付交付書付左ノ如シ

上州仁田山百姓三郎兵衛と申者去酉三月八日同國今泉村元主人半左衛門父子を切殺次男に手疵負せ致欠落候付同年七月三郎兵衛人相書を以相觸候處今以不出候先達而相觸候人相書之通之者有之は彌無油斷相改其所に留置之寛播磨守方へ可相達候以上

右之通可被達候

戊七月

十五日諸大名貯米ニ關シ閑老交付書付左ノ如シ

近來は豊年打續候間凶年の爲手當置米被 仰付事候間諸大名も米穀等可成程は被貯置候様可被心得候以上

八月

同日湯淺市兵衛組並番手三番手勤續ニヨリ召下吳服下付賞詞アリ

十六日横地長左衛門門弟槍術上覽ニツキ側衆二男ト惣手回ノ嫡子ト入交リ筆次ニ

關シ山中與一兵衛御小納戸馬屋原彌四郎平番御大組ニテハ山根六郎右衛門外廿三

人ヨリ申告セリ舊記詮考ナリシニ側衆二男ハ惣手回嫡子ノ次座ニシテ又ハ遠近付

本人ノ次ニモ出席スルハ前格ナリ今回新規ノ申告ヲ爲シ上覽ニ出席セサルハ大法

ニ背キタルヲ以テ與一兵衛二男山中金次郎彌四郎弟馬屋原六之助山根六右衛門外

廿三人ニ逼塞ヲ命ス

與一兵衛二男山中 金次郎 彌四郎弟馬屋原六之助

右今度横地長左衛門弟子中兵法可被遊上覽旨付而及其沙汰之處御側相勤る者之次男三男等惣御手廻嫡子之次へ 御目見等に被召出候段心外候間大組嫡子の次へ被相加候様無左候は、差出苦敷之由兒玉傳兵衛へ與一兵衛彌四郎内々を以申に付而令沙汰候處段々先規有之儀今更被相改候様に不相成候故古格之通被仰付候趣之由傳兵衛より申達候へ共兩人共不快之由に而不能出候依之猶又舊記等食

議被仰付候處前々より兵法 上覽之節御裏年寄等の次男三男と候ても惣御手廻
嫡子の次座又は遠近付本人の次へも罷出候儀度々之事候故自今以後の儀彌以前
格之通惣御手廻嫡子の次座へ被召出候段勿論候右之趣候處今度新規の儀を申立
不罷出段不心得の儀候其上 上覽之儀被仰渡候而は縦心外に存儀有之候共一旦
遂其節御断の節有之儀におひては追而可申出儀を無其儀御大法も有之候處 上
を輕しめ候仕方甚以不謂儀候依之逼塞被仰付候事

横地長左衛門

右兵法 上覽の節大組惣御手廻筆並之儀弟子申方の趣記録所罷出申に付而古來
よりの格式等委細申聞候由於然は弟子中申有様も可有之の處於長左衛門も弟子
中申分に致同意段不心得の儀候前々より兵法 上覽の節は諸組段々混雜に而相
濟來候待共此度下に而何角と申之由に付而僉議被仰付候處江戸御國共に正月其
外御連歌の節大組惣御手廻毎々御連衆に被召出就中正月十一日之儀は 御前着
座をも被仰付事候得共身本の御構も無之古格を以いつれも分際次第に諸沙汰相

成扱又於江戸限有御客等の節は大組惣御手廻打込に而被召仕役付張紙にも分限
次第に被仰付候儀度々の事候故自今已後兵法 上覽の節も格式混雜の様には不
被仰付候條左様相心得候様にとの御事

廿九日町奉行井上源三郎ヲ大坂留守居ニ大組物頭粟屋五郎兵衛ニ井上源三郎代町
奉行ヲ命ス

同日養子ノ制閑老交付書付左ノ如シ

實子有之處兼而老中并頭支配へも不相達置當分養子等願之追而實子有之由申
聞候儀近來間々有之不都合成事候旨御沙汰候實子出生有之病身等にて老中并
頭支配にも不相達家來等に遣し置入用の節に至俄嫡子に仕度段被相願候儀は
難成右之通之品も候は、病氣も快成候間嫡子に可仕存候刻前以老中并頭支配
等え可被達置候尤未子にても同様の事候

右之通可被相觸候以上

戊八月

九月朔日大膳君邸頭人手回頭兼務板本彈正へ訓令左ノ如シ

一御部屋の儀は御手輕被成儀に付其方并志道太郎右衛門佐世大學三人順番にして諸事の御用兼役にて所勤被仰付候間不依何事一切の儀承届引請可致沙汰候事

一何にても奉存寄候儀有之候は、無遠慮可申上候且又 御幼年様の御事候條御部屋の儀は御納戸の御用其外御表に而當役御手廻頭不及承程の濃々の儀をも聞届萬端しまり能可致沙汰候事

一御部屋付の面々行規作法猥の儀無之様手堅可申付候若不心得の者於有之は大膳様及 御聞御國可致言上候萬一當座難差置者有之候は、是又 大膳様え申上如何様にも申付追而可遂言上候事

戊九月朔日

二日毛利竹之助袖留閑老伺許可アリ

三日大膳君五節旬月次登營ノ事乞願允許アリ九日ヨリ登營

六日藏元兩人役福原次郎右衛門札方頭人ヲ命ヌ三宅五郎左衛門ニ藏元兩人ヲ命ヌ十一日萩城諸番所諸口取締ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

一御城諸番所口々しまりの處有之儀候不しまりの節はいつれも限らす申談しまり被仕儀候殊更 殿様御通の節御目通りなどの儀は前々より銘々引受しまり被仕儀候間愈其心得有之候様楮又御番衆等常に不被差置御通りの節にかきり相詰候所有之儀左様の所 御目通りしまり旁の儀に付ては享保八年委細書付を以相達之處到頃日は猥に成候様に相聞候御番衆の儀は追々組入御番入等も有之儀候へは可爲不案内候條愈以最前相達候通未を參り候衆しまり被仕儀候は勿論若外より誰にても往來仕候節ふしまりの儀有之候は、跡しめ置候様其所相詰候向寄の衆より氣を付け何分御通りの節しまり被仕候様に其番の最初に支配方より能々可被申聞候事

一在役の面々病氣及大切御役差上候儀流例に相成候へ共其謂無之候條自今以後

病氣及大切候とも御役御免の御斷可被申出候事

一何ぞ故有之組支配等差上候儀是又流例に相成來候此等の儀 上之御沙汰次第の儀全下にて決定仕可被申出儀に而無之付て向後の儀組支配難相成譯於有之は御斷の筋に被申出何分可被請御下知候事

右之通被仰付候條被得其意組支配中へも可被相達候以上

戌九月

十三日無給通勝屋孫右衛門大坂買物方勤務中逃走ニヨリ給米沒收遠近付越智新右衛門發狂自殺嗣子ナシ五人扶持ニ米八石沒收

十五日三隅勘右衛門幸橋夫人裏老ヲ免シ八谷五兵衛ニ後任ヲ命ヌ勘右衛門ニ召下上下一具銀五枚下付

十六日先是幕令アリ若シ國內鈔札ヲ用ント欲スルモノハ許可セラルヘシト於是本年ヨリ二十五年間通用許可ヲ乞願セラル國內十一月ヲ以テ通用ノ始トス

鈔札延寶五年始テ國內通用寶永四年禁停ノ幕令アリ此ニ至テ又之ヲ許可セラル

是時徳山領格幣通用ニ關スル舊記所載左ノ如シ

徳山御領札遣に被仰付度由にて此御方古札の内御所望に付札銀八百八十貫目可被進との御事にて同幕彼御家來光井五郎左衛門え引渡被仰付候地方引請にて彼所委細控有之に付此所不記候事

右之通被進候札之儀は往古通用被仰付候札に付て於徳山取歸此度改めて印形突關通用仕せ可申候間此御方燒印御貸被成候やうにと光井より相頼候付て鐵八角燒印三本五郎左衛門え貸渡被仰付受取之手形地方に取置候事

但長府御領は札遣不被仰付候事

享保十五年戊十一月

本年十一月岩國領札遣に關し詳細の記録あり長文を以て略す

廿三日毛利但馬守賜暇二十六日江戸發十月八日伏見著九日ヨリ麻疹十九日同地ヲ發シ晦日歸邑

廿五日毛利主水正神田橋門番命セラル毛利刑部少輔幸橋門番命セラル

同日本年正月十五日萩城式臺帳着ノトキ伺公席ニ於テ國司與一右衛門組頭粟屋九郎右衛門ニ對シ緩急ノ行動アリ九郎右衛門所管ヲ除キ月番所管トナシ公裁ノ結果九郎右衛門遠慮與一右衛門逼塞番頭粟屋新左衛門遠慮又與一右衛門ヲ九郎右衛門組ニ所管セシム

是時遠近方ヨリ内諭左ノ如シ

覺

當正月粟屋九郎右衛門并組中御式臺伺公座席の儀に付九郎右衛門へ對し國司與一右衛門申方の趣有之座席の儀は相濟候處與一右衛門心得の儀に付九郎右衛門より與一右衛門方へ様子相尋表方申出候右之趣に付相組中其外共寄相申談等々、敷仕銘々覺書相認支配方迄差出候心得の者も有之様に相聞候縦いか様の譯有之候ともさ、敷寄相等可仕儀にて無之候處に甚以不心得の儀候表方申出候上は何分上の御計有之儀下として何角と可及僉議儀にて無之候若此上不相止不心得の者於有之は相組中其外共無據急度被及御沙汰別而發端の者又は會座の本人

御答可被成候此段内意相達候様にとの御事

八月十八日

遠近方

十月十二日公來年^{享保十}六^亥五十五歳ニ達ス厄入ニ付滿願寺春日ニ於テ祈禱修セララル十五日毛利宇右衛門廣規元祖元氏^{吉川元春二男繁澤氏ヲ繼ク後毛利ヲ稱ス}百年忌修行ニツキ香奠銀三枚下付

同日目付役兒玉市之介ニ公儀人ヲ命ス判役毛利四郎左衛門ニ目付役ヲ命ス廿九日志道太郎左衛門^{表手回頭也根本正佐世大膳君勤務}三人^{順番ヲ以テ}大膳君^{勤務}去年大膳君供從出府頭人命セラレシニ死去ニ因リ嫡子貞之允へ香奠銀一枚下付

月日不詳謁見ノトキ出頭番頭勤方ニ對シ江戸當役ヨリ手回頭へ訓示左ノ如シ

一於御與御目見披露等の儀出頭衆番頭衆勤方混雜有之様に相聞御記録にも入り交り有之候然先唯今の通にて相濟度儀候へ共其分にては双方時々仕苦敷品も有之由に付御内々相伺候處左の通被仰付候尤双方唯今迄の趣とは品に依違候儀も可有之候へ共御代々の御格式且近年の趣旁御引合御吟味の上被仰付事

候双方共御側近く被召仕重き御役之儀候條 御爲を於被存は彌令一和双方助相御間不闕様に可被相勤儀勿論之事

一出頭衆番頭衆勤方表向御内證差別有之儀候へ共式日御目見披露等の儀御一門衆老中衆を始出頭衆番頭衆御裏年寄公儀人迄は御手廻頭衆披露にて候自然頭衆相障候節は出頭衆の可爲披露候出頭衆不被居合節は番頭衆の披露たるへく候事

一出頭衆番頭衆御裏老公儀人等の子共式日御目見の儀寄組以上の様には古往無之中古より御内證にて獨禮有之由其格を以今以被召出候故番頭衆披露の儀候尤御小性等の儀猶以番頭衆可爲披露候將又近代御目付當番計御奥之 御目見被仰付候右之通役人の子とも披露に引續候儀故御目付一人の儀に出頭衆被差出かも不違最初以來番頭衆披露仕來と相見候彌以其通たるへき事

一御裏老公儀人御役成御番手交代の節披露の儀御控にも出頭衆番頭衆披露入交相見候式日には御手廻頭衆披露の面々に候へは先御手廻衆え披露被仰付候追

而何分可被仰出候事

附御目付衆御役成御番手交代の儀は唯今迄の通御廊下通被召出候事

一表方御使者等に御部屋出頭衆番頭衆御裏年寄なと被差越候節於御居間披露の儀も唯今迄の通御手廻頭衆自然障候節は番頭衆可爲披露候尤表方にて無之御使者の儀は番頭衆披露たるへき事

一御手廻組の面々何ぞ御用有之御格式の外御居間等へ被召出候節は番頭衆の可爲披露候事

一於江戸式日御居間に而 御目見の節當役中を始公儀人迄披露の儀御手廻頭衆障候時は先唯今迄の通出頭衆番頭衆替りく可被相勤候追て何分被 仰出にて可有之候將又於御居間書院右の面々 御目見の節御手廻頭衆障候時は出頭衆披露出頭衆障候時は番頭衆可爲披露候事

但御目付衆の儀は唯今迄江戸御國にての格も有之儀候間番頭衆可爲披露候然とも其節の趣によつて申談可被相勤候儀勿論候事

右之通大概被相定候條申談無滯様に可相心得候以上

十一月朔日は日ヨリ國內楮幣通用始ル萩地三所諸郡七所札座ヲ置キ楮幣購買セシム諸臣へ百石五百目宛貸借ヲ許ス吉元公記

十一日内藤豊前守弑信死去豐前守室ハ綱廣公萩山口三田尻鳴物停止三日間香奠銀廿枚納付

十四日夫人麻疹

今秋以來諸國麻疹流行家重大納言を始め老弱男女一門諸大名是病に罹るもの多しと云

十五日從三位中將徳川右衛門督吉宗前髪ヲ執ル諸大名惣出仕公飛札ヲ以テ祝セラル

同日八組頭益田圖書ニ手回頭ヲ奏者清水宮内ニ八組頭ヲ命ス檜崎久右衛門ニ來年江戸矢倉方頭人トシテ出府ノ命アリ

十八日大膳君袖留

十九日綾姫死去八歳吉元法名清心院龍昌院ニ葬ル

廿二日家重大納言麻疹ニ罹ル諸大名惣出仕十二月五日公飛札ヲ呈シ候問セラ

廿三日是日ヨリ大膳君不快二十八日ヨリ麻疹十二月六日酒湯ヲ引ク

廿九日勝姫松平兵部大輔麻疹妹宗廣公縁女麻疹

日不詳御中間以下袴着用禁止吉元公記

日不詳一季居男奉公人出替ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

一一季居男奉公人出替の時節之事

二月二日

八月二日 半季

右只今迄正月七月に被相定候得共御參勤御時節如前々相成候付來亥之春より先年之通被仰付候事

享保十五戌十一月

十二月三日毛利但馬守廣豐室松平遠江守忠裔女病アリ松平遠江守邸へ歸リ十一月二十八日ヨリ麻疹ヲ悶フ是日卒ス五日但馬守邸ニ移シ七日青松寺ニ葬ル

六日祖式又右衛門旗奉行兼勘定奉行ヲ免シ三戸長右衛門ニ後任ヲ命ス又右衛門數十年勤績ニツキ召下上下下付

九日國司衛士ニ粟屋九郎右衛門代大組頭ヲ命ス

十一日長府領豐浦郡早魃ノ爲メ田方高壹萬八千六百五拾五石餘被害アリ之ヲ幕府ニ報ス

十二日八月五日六日風雨洪水ニヨリ被害景況左ノ如シ

一高三萬石餘

一土手石垣三千七百間餘

一倒家六軒

一倒木八百八拾本餘

一獵船貳拾八艘

當職ヨリ提出現損込付立左ノ如シ

覺

一檢見田高壹萬六千五百五拾五石餘

但此追損米貳千九百拾三石餘

一田高三拾四石餘 永否

一同 四拾貳石餘 當否

一土手石垣切損千貳百三拾八間

一倒木八百七拾九本

一倒家六軒

一獵船貳拾八艘 破損

追損永否當否共

一高七千三百五拾八石五斗

右之高を三倍にして

貳萬貳千七拾五石五斗

三倍にして

一土手石垣切損三千七百拾四間

十五日朔日歳暮祝禮綾姫不幸大膳君忌服ニヨリ是日萩城式臺ニ帳簿ヲ設ケ諸臣ノ拜賀ヲ受ク

十六日手回頭佐世大學大膳君頭人志道太郎右衛門病アリ代トシテ手回頭榎本彈正九日朔日出府ヲ命セラレ此間大學一人役トナリ勤勞ニヨリ召下羽織下付
十七日儉約ニ關シ閣老交付書付左ノ如シ

近年打續米下直に付何も勝手難儀仕候由度々儉約の儀被 仰出候へとも諸人花美に成來其心不相止候來春は急度儉約の儀可被 仰出候先其内も致勸辨何分にも勝手取續候様可仕候右之趣御簞本の面々へ申渡候間被存其趣候様に寄々可被相觸候以上

戊十二月

十八日毛利竹之助匡平後改從五位ニ叙シ刑部少輔ト改名

十九日郡夫奉公人給銀規定左ノ如シ

覺

一銀八拾目定

但江戸奉公人諸郡よりの出人一季恩銀の分尤一季の外子の三月より詰

越の分は壹ヶ月銀七匁宛遣候様に被仰付候事

一同三拾貳匁五分定

但主人江戸罷居召抱連越候節出足の時分船中諸入目大阪より江戸迄旅

籠代の分於萩奉公人へ遣可申候尤主人江戸殘居下人計差下候節も道

中銀として右の辻遣等候事

一同四拾目定

但地奉公人一季恩銀の分

右江戸奉公人殘有之分萩住宅の諸士中へ召抱候様被仰付候依之一季の恩

銀前書の通被相定候尤奉公人望次第仕着せにて成とも又は恩銀の沙汰にして右の辻相渡候様成とも銘々約束次第被仰付候事

右前書之通諸郡出人奉公人の御沙汰相成候左候て地下より付出の儀も當月廿五日を切に差出候様御代官衆へ御沙汰相成候江戸召連罷被登候衆望出の儀も當月廿五日を切に御藏元兩人所にて郡夫方役人張半藏方へ付出被差候事様にとの御事

一江戸郡夫残り有之分萩住宅の諸士中へ御渡させ被成事に候間是又右日銀に郡夫方へ望出被仕候様にとの御事

一御家來中望出有之とも郡夫纒の事に候へは物足り不申候條去年の通關取を以御渡させ被成候條右日限過候へは關取相除候事

一郡夫望出關取當候衆入用に無之由にて被差戻候儀有之間敷儀候然共無據子細有之候は、特別の儀候條其人柄餘人へ召遣候儀は勿論日々雇の沙汰にして召仕候儀も一切被差留候間問屋へ引渡被申候様にとの御事

戊十二月十九日

同日三十人通岡田半左衛門發狂妻子ヲ殺シ自殺ヲ謀リ負傷セリ依テ貳人扶持米三石沒收

廿六日禁裏法皇麻疹全快酒湯式アリ諸大名惣出仕世子大膳君毛利主水正同伴登營公使札ヲ以テ祝セラル

廿七日裏判役口羽衛士財政用務ヲ帶ヒ上坂盡力ニ因リ銀廿枚下付

廿八日大膳君加首服吉宗將軍偏諱並腰刀備前國守代賜ヒ從四位下ニ叙シ大膳大夫宗廣ト稱ス十四歳

廿九日大膳君明細書幕府へ提出セラル

長門守嫡子

本國安壽
生國長門

松平大膳大夫

戊十六歳

享保十五庚戌十二月

同日藏元檢使境佐左衛門ヲ手回組ニ加へ大檢使ヲ平田伊右衛門ニ吉田代官ヲ命ス

日不詳三田尻田島海鹵開拓ノ議決發令アリ

日不詳御在國中寄組以上在郷賜暇及江戸京各邸へ祝禮等ニ關シ訓示左ノ如シ

一近年御在國月數多内は寄組以上御役に而無之面々御在國中何ぞ無據儀於有之は御了簡を以一度宛月切在郷御暇被差免候へ共向後御在國中の儀は前々の通在郷御暇被差免候事

但御役付休等の面々の儀是亦可爲前々の通候事

一大組の儀御在國月數多内は御留守年の格に一組一ヶ月詰抜に御番被仰付候へ共御參勤御割合古來の通相成其上老體病身の者共は詰抜の御番迷惑の廉も有之候間前々の通御番被仰付候様にと番頭中願の趣も有之由に付來正月より三十六番一日一夜詰に被仰付候事

但御留守年の儀は只今迄の通一ヶ月詰抜たるへき事

右御參勤御割合古來の通相成候付而向後の儀如此被仰付候以上

戊十二月

江戸京 上々様方え御悅等被申上候儀只今迄は時々御差圖も有之差當候儀は下より聞合せ等無之儀も有之候向後は差當候儀は時々御差圖無之候條吉凶共に右の心得を以て前廉時々聞合有之候は、何分御差圖可有之候此段御内意申候様にとの御事

月日不詳吉元公記

當年地下御馳走石別四升被仰付候

御寶藏御武具方分る

○御役人帳に御重代御道具始天守置之山田下總守元重自慶長十九年守護數人交替之儀後毛利就方職役中御寶藏始建武具方在別局

八幡方木梨彌右衛門役中御役人通格を以於關相勤候様にとの御事

當年より十八年丑迄之間拾五石懸り位御馳走

○坂時存遺塵抄に觀光公御家督前年より三四ヶ年引續非常の臨時重き御馳走被召上之文言有之

享保十六年辛亥正月朔日公萩城ニ在リ諸臣ノ謁見ハ總テ是日ニ行フヲ佳例トス頃
公微恙アリ長坐ニ堪ヘザルヲ以テ寺社組迄ハ元日登城無給通以下二日三日ニ參賀
ヲ受ケラル

六日ヨリ九日ニ至ル大雪

十五日幕令アリ將軍故障アルトキハ大納言勤禮ヲ受ク向後其時々告示ニ及バズト
ナリ

十八日當職堅田安房ニ黒印ノ令條ヲ授ク

廿四日台徳院殿將軍百年忌増上寺ニ於テ法會アリ

廿五日諸大名へ豫參ノ令アリ世子病ヲ以テ辭セラル公ヨリ香奠銀五枚世子ヨリ貳
枚納付

廿三日ヨリ廿四日ニ至ル深川大寧寺ニ於テ台徳院殿百年忌法會修セラル名代總率
行益田越中

廿八日大粗物頭内藤新右衛門ニ寧姫裏老ヲ秋里五郎左衛門ニ大組弓頭ヲ命ス松浦
喜右衛門ニ京都留守居役ヲ命シ雜賀十右衛門ト交代セシム

二月十五日毛利音之允請求アリ金百五拾兩補助セラル

同日手回頭兼世子邸頭人志道太郎右衛門死去嫡子貞之允家督ヲ謝シ太刀小馬代一
荷貳種ヲ獻ス不時献上ハ許サレザル例ナルモ家柄ニ對シ先格ニ依ラナリ

十六日弘中長左衛門ニ白井友之進代上關代官ヲ田中善左衛門ニ草刈六左衛門代長
崎間役ヲ命ス

廿一日儉政ニ關シ黒印令條及老臣添書左ノ如シ

年來不勝手に付借銀過分に及び既近年用心銀迄差出といへとも去春に至り不得
止三ヶ年の間猶又儉約等の吟味をとけ先去年家中出米の令沙汰の處に其後大坂
におひて不慮の損失出來其上秋以來米紙の直段漸々下直相成積り方莫大に令相
違第一大坂表出銀無之當春參勤の料を初在府中仕送りも難相成趣に相聞によつ
て猶々江戸國元ともに儉約を盡といへとも元來減少の事故只今餘分勝手の筋に

も不相成に付右仕組間の儀は彌以打續馳走を請るの外これなし當時家中困窮可成程は救の沙汰に及び度折柄却而出米の儀申聞る段氣の毒の至候へとも誠に上下大切の時節於途馳走は可爲本望候條其旨を存し且々取續の心得有へし委細年寄共より申聞すへき者也

享保十六年二月廿一日 御 黒 印

覺

多年御不勝手に付御借銀彌増去々暮江戸御國の御用心銀迄被差出漸御越年相成候へ共至去春猶又御差詰に付三ヶ年の間重く御儉約等の被途御吟味先去年御家來中出米被仰付候處到去夏不慮に大坂表似せ切手の儀に付夥敷御損失有之其上漸々米紙之直段下直相成到當春は莫大に御積方も令相違殊頃日は上方表出銀も無之剩御用聞共も身分儉約の儀申出候程の儀に御參勤の御入用を初御在府中の御仕送必至と差岡上下共に至極大切の時節に相成候依之猶江戸御國共に種々御儉約の沙汰被仰付候へ共御參勤の上は 公儀御役目の儀は且々も御間合候様に

無之候ては不相叶儀勿論候其外の儀におひては江戸御國共に猶々吟味被仰付候品も有之候へ共年來段々被減置儀候故過分の御償にも不相成不得止今來年も去年の通被請御馳走候御家來中及困窮候由去冬以來頭々より度々具に被申出御救をも被仰付度時節に候へ共別段の御方便無之ヶ様の被及御沙汰候段別而御苦勞に被思召候乍此上米紙の直段等も宜敷相成御繰卷且々相調程に候は、出米の内少に而も被差返度御思召に候此時の儀候條いか様とも面々取續之被致覺悟於被途御馳走は可爲御祝着候且又至極困窮の輩爲取續今來年の内は御扶持方成の仕法別紙之通被仰出候條旁可被得其旨候以上

亥二月廿一日

山 縫 殿

堅 安 房

毛 伊 勢

毛 宇右衛門

廿六日年來大坂倉米藏元大黒屋善四郎大塚屋源右衛門兩人ノ手代悪計ヲ以テ米券

ヲ偽造シ爲メニ重複ノ支出トナリ多大ノ公損ヲ來シタルハ職務緩怠タルニ因リ留
守居生田猪右衛門中村孫右衛門檢使李家九左衛門志道藤藏羽倉久左衛門齊藤左介
粟屋平二右衛門差引方林六右衛門御手洗正右衛門村田武右衛門來島九右衛門通塞
家祿減少隱居等各處罰アリ

廿七日諸臣拾七石掛馳走米江戸火災ニツキ本年ヨリ卯年ニ至ル五年間拾七石掛ノ
外三石宛課出セシム吉元公記

廿九日萬石以下箴下へ訓令閣老交付

一衣服諸道具等随分有合を用ひ古く候共見分無構可用之新規の儀可爲無用候朔
望廿八日其外御規式等の節は格別平日は白小袖着用不及候事

但上着に只今迄島類着用無之候向後有合に着用すへき事

一家來の衣服猶以見苦敷候は、被用候程は可用之并綿布取交候ともいつれも勝
手能様可申付候尤女の衣類可爲同前事

一家作等不急儀は無用の事

一惣而 公儀へ懸り候儀格別家督嫁娶を始一類中の贈答只今迄の半分たるへき
事

一家督嫁娶の振舞は近年御定の趣を以猶更輕くいたすへし其餘の祝儀には吸物
盃事にてふるまひ無用に候小身の輩は一向に吸物盃事たるへき事

但常々參會平日用ひ候給物の外少も取繕申間敷候事

一可成程は知行所之者召置可然候惣而相對に召置候者も何用にも用事辨之男振
無構可召置事

右之通三ヶ年急度可被相守候以上

亥二月

三月朔日梨羽宮内記録所役ヲ免ヌ村上又右衛門ニ目付役ヲ命ヌ當職所筆者村上十
右衛門ヲ遠近付ニ加へ馬場先夫人檢使役ヲ命ヌ新陰平岡彌三右衛門馬木宗六健健
横地長左衛門躰方緒方仲助數年館中出務多數ノ門弟ヲ指南セシニヨリ召下上下下
付

二日新地ノ寺社建立制禁訓示左ノ如シ

覺

一新地の寺院建立の儀被差留候尤古來斷絶の寺院或寺號式本尊等殘居候分追々再興の願被差免來候得共被差留候然共寺敷御除有之分又は家敷數多有之於近郷寺一字も無之所等の儀は依品可被遂御許容段享保三年御書付被差出候其後寺社所替の願有之候は、及御聞其沙汰有之候様にと享保十三年被仰出候右寺號等殘居候分其近郷寺一字も無之其所家敷多有之分近年は寺社奉行衆御當役中へ直に被申伺沙汰相成來候へ共右之御書付の趣も有之依品可被差免との儀に候へは遠近方迄右類の願をは被差出御寄合の上御僉議有之候而江戸方被差越及御聞被差免可然との儀に而縫殿殿御留守居方被仰談候處其通可然との御事に而右の段被相決候向後は遠近方被差出候様にとの趣寺社組證人天野喜右衛門方へも申達候事

享保十六三月二日記之

右之通享保三年御書付ノ内新地寺院建立ノ所ニ

向後寺社所替の願有之候は及御聞其沙汰仕候様にとの御事

享保十三六月

五日公萩發駕今年ヨリ當役山内縫殿加判毛利宇右衛門

十五日天樹院當住衛州西堂出世ノ公帖降下ニツキ上京スヘキヲ金地院役者中岩ヨ

リ命令書到ル

四月朔日將軍鷹捉ノ鶴ヲ賜フ

十二日諸大名參覲拜謝等ノ爲メ登營ノトキ衣服ニ關シ閑老交付書付左ノ如シ

- 一 參勤御禮の節御禮仕候者の外は服紗袷可爲着用事
 - 一 御暇にて被爲 召候輩も服紗袷可爲着用事
 - 一 上使を以被下御暇候輩爲御禮登 城の面々尤熨斗目袷可爲着用事
- 右之通可被相達候

四月

十五日江戸大火櫻田邸新橋邸類焼因テ夫人及世子麻布邸ニ移ル公旅中酒匂川驛ニ類焼ノ報告到ル

十八日公著府麻布邸ニ入ル途中病ノ爲廿二日上使

同日邸内張紙訓示左ノ如シ

條々

一天下御制法の旨并御當家御法度相違有間敷段勿論の事候且又在江戸の御法兼而被仰渡候趣可被存其旨事

一諸所番所役所無闕如尤被定置交替の刻限不及遲滯諸事行規作法能可被相勤事附諸傍輩へ對し何ぞ難差置儀出來候とも於殿中は可有堪忍段勿論候事

一殿中火用心猶以可被入念事以上

亥四月十八日

山 縫 殿

毛 宇右衛門

廿五日服紗袴ニテ登 營ニ關シ大目付回狀左ノ如シ

四月十五日 廿八日 五月朔日 九月朔日

右は向後服紗小袖可有着用候尤四月朔日は只今迄の通可爲熨斗目袴候

四月

同日類焼ノ萬石以上ノ輩へ家作ニ關シ大目付回狀左ノ如シ

去る十五日類焼の萬石以上の面々上屋敷中屋敷家作の儀火除に成候様可被致候尤可成程は瓦葺に可被致は勿論の事に候右の趣可被相達候

四月

廿七日登 營ノトキ供從ノ輩行規作法ニ關シ訓示左ノ如シ

一殿様御退出の節猛勢をせり合罷出候儀無用に候御供少々遅々仕候ても不苦候間込合不申處迄罷出御供可仕事

一挾箱へ腰掛候儀堅無用の事

一タハコ給候處無用の事

一頭へ何にてもかぶり候儀無用の事

一西東大下馬に而御登 城日御使者等馬上にて通候儀御法度に候條下馬仕鎗を
ふせ候て猥に無之様に可被罷出候事

但西下馬の儀同勢の後を通候得は不逮其儀候事

右の外何にても何分前々より御法度の越旁無相違様御供の面々能々致得心末々
又者至迄宜被被申付候若違背候者有之候は、一廉御咎可被仰付候又者の儀は其
身は不逮謂主人も迷惑可被仰付候勿論惣而御ありきの節行規作法等相慎候段は
改めて被仰出迄も無之候事

四月

廿八日公父子登 營拜謝献物如例

同日毛利主水正家督後初テ賜暇吾邸ニ來ル馬一匹進セラル

五月朔日毛利主水正歸邑告別ノ爲メ來邸料理ヲ供シ拾羽織二切付五脊箱肴一種進
セラル

八日加判毛利宇右衛門當役山内縫殿乘輿請願許可アリ

同日大目付回狀左ノ如シ

所々手あやまの沙汰有之候其内出火の様子あやしき儀も有之外より付火等
いたし候儀とも不相聞趣の取沙汰有之候間火の本彌入念申付尤随分心を付若
あやしき者候は、急度可被遂吟味候以上

五月

右之通可被相觸候

十日長沼九郎右衛門ニ三宅五郎左衛門代藏元兩人役ヲ命ス

同日獄屋番山崎作右衛門所管ノ三右衛門養子結縁ニ關シ不正アリ三右衛門出訴ニ
及ヒ審問ノ結果囚徒ノ賄米ヲモ窃取シ平素ノ惡計判明セシニ因リ入獄ノ後斬首ヲ
命ス作右衛門弟山崎三左衛門兄作右衛門ト同ク逃走士道違背ノ形蹟アリ入獄ヲ命
ス

十四日後房行規作法ニ關シ訓示左ノ如シ

條々

- 一御裏御番衆行規作法能諸事御裏年寄受差圖可遂其節候事
- 一自然御近所火事の時御供の次第其外御表より沙汰可被仰付候間御付けの面々常々無油斷心得肝要候事
- 一鎖の口より内へ御定の外の者出入堅停止候事
- 一附幼少たりといふとも十一歳以上の男子出入停止候事
- 一附御取次役の儀御用の節は御茶間迄可被參候事
- 一附御膳夫并爰方の者御膳の時計御末迄可被參候事
- 一侍中其以下下々迄御門出入〔六時より晩の六時限たるへし自然不相叶儀有之時は御裏年寄聞届可有沙汰事
- 一鎖の口より外へ暮六ツ以後女中出候儀停止候事
- 一附不相叶子細於有之は御裏年寄承届可有其沙汰事
- 一女切手の儀は御裏年寄切手たるへし尤御門にて相改可通事
- 一女中え親族より差越候使〔儀は御取次役〕 能様可有其沙汰候

事

附女中え相對の儀は一切可爲停止候事

右被仰出候條堅固此旨可被相守候以上

亥五月十四日

山 縫 殿
毛 宇右衛門

廿三日毛利主水正長府入部

廿七日留守居老中井原市正歸國ヲ命スルニ因リ羽二重單羽織白銀五拾枚下付

六月七日浮浪人検査ニ關シ大目付回狀左ノ如シ

近き頃浪人者の由にて先主の名を申武士并町方え參錢を貰ひ途中においても往還の者え物を貰ひ候由相聞へ候此以後宅え參候は勿論往還にても右體の儀有之は其所にて捕置月番の奉行所へ召連可罷出候彼者申方に任せ内證にて錢其外の品遣し候儀堅無用に可仕候
右之通可相觸候以上

六月

九日夫人裏老井上彦右衛門辭職ヲ許シ歸國ヲ命ス召下拾銀五枚下付

十一日將軍吹上ニ於テ新鑄ノ大砲ヲ覽ル徳川十五代史

十一日ヨリ十三日ニ至ル青雲公廿五回忌青松寺ニ於テ法會修セラル銀拾枚米貳拾俵納付

十六日嘉祥式ニツキ大膳君初テ登營公病アリ登城ナシ

十八日手回頭兼世子邸頭人板本彈正歸國ニツキ公ヨリ召下羽織世子ヨリ召下帷子下付

廿日林宇平次穴戸美濃へ途中ニ於テ木履ヲ脱セザルニヨリ整居ヲ命ス

七月朔日兒玉彌五郎江戸三番手勤績ニ因リ遣帷子一單物一下付

五日毛利刑部少輔前髪ヲ執ル

十一日晝大雷雨

廿三日將軍鷹捉ノ雲雀ヲ賜フ

同日毛利綱元側室房春子死法名貞性院

八月四日氷川明神境内歩行ニ關シ内訓左ノ如シ

氷川明神の境内近邊段々致繁昌茶屋ノには遊びものなとも居候様に相聞候間御家來中參詣の儀は各別兼て御法度有之儀候條彼邊茶屋へ立寄ニ酒にても呑候儀は被致用捨候様ニ候御屋敷近の事ニ自分ノ小屋にて認等被仕罷出候歟又は被罷歸候而被給候而相澄儀勿論候尤御上屋敷其外馬場先幸橋御裏被相勤候衆の儀も右同前に被相心得候様にとの儀に候右の趣御目付衆へも被仰聞置候付御内意申達候條此段御支配中可被仰達候以上

八月四日

七日毛利但馬守廣豐着府

八日公春來眩暈怔忡心ヲ憂ヒラレ歩行ニ惱ム因テ城中用杖乞願ナリシニ許可アリ十四日買米運送等ニ關シ閣老交付書付左ノ如シ

當夏買米可有之旨相達候得共先不及其儀候去秋申達候置米の事は此度相觸候通

可被心得候以上

八月

江戸大坂え廻米の儀近年被相廻候高より多相廻候は無用に候右相廻候米も一度に多不相廻候様可被致候且又去秋申達候通置米の儀可成程は多可被申付候尤向後年々詰替右之通可被相心得候以上

右之通萬石以上之面々え可被相觸候

廿日井上河内守夫人死去公ニハ實方ノ姪ナレトモ本家相續ニツキ公父子忌服ナシ

廿七日松平出羽守宣維死去廿九日ヨリ鳴物停止三日間

九月六日吉川左京使ヲシテ參府ノ請願セシモ公不例ノ爲メ延期ヲ達セララル

十一日公春來眩暈ノ病アリ本月ニ至リ病勢日ニ重シ之ヲ當番閣老ニ報告セララル是日奏者番稻葉佐渡守ヲ使トシ病體尋問ノ懇命ヲ傳フ公臥蓐禮服ヲ加へ使者ニ待接セララル

御家譜引書所載吉元公

一御容體付并御勝手ノ御衆中様御名付同時上使御取歸被成候由主馬殿御申ニ付被成御相談左ノ通被仰付候事

覺

一當春以來眩暈怔忡にて相勝不申候處疲強食餅段々減一兩日別而大切に罷成候付而昨十日の晩御用番え御届仕候其後差而相替儀モ無御座候得共彌不食勞倦強罷在候

一昨晚七時過葛切四匁餘給申候

一同夕より河野松庵藥服用仕候

一同夜四時前粥四拾目餘九時過粥八匁餘給申候

一十一日六時湯漬食四匁餘六半時過粥貳拾七匁餘給申候

一八半時大麥切拾八匁給申候

九月十九日

別紙に

河野松庵樂本劑人參七分參姜湯三夕兩劑服用仕候

勝手

松平兵部大輔

松平左兵衛督

松平大和守

池田内匠頭

毛利刑部少輔

田村主馬

御容體書の儀も同斷主馬殿上使え御渡被成候事

一上使御歸以後爲御禮左の御方々え爲御名代毛利刑部少輔様を以被仰入候尤常

體の儀候へは 大膳様被遊御廻事候へ共御心添をも被成儀に付右の通候事

十三日公ノ病湯藥無驗是日午牌麻布邸ニ於テ卒去因櫻田邸年五十有五瑞聖寺ニ葬

儀ヲ修メラル諡曰泰桓院仰岳淨高靈柩經木曾路中國路下於長門葬於東光寺江戶瑞

聖寺亦有墓

御家譜引所載吉元公

一公儀え爲御届早速毛利刑部少輔様を以被仰入候趣左に記之

松平長門守病氣養生不叶唯今果申候繼目の儀嫡子大膳大夫え無相違被仰付

被下候様と奉願候由存生の内申置候以上

九月十三日

毛利刑部少輔

別紙に

松平長門守今十三日死去仕候付而嫡子大膳大夫忌服之覺

忌五十日

十一月三日迄

服十三ヶ月

來子九月迄

右之通御座候以上

九月十三日

松平長門守九月十三日死去付而忌掛之覺